

棚田の灌漑システムからみた 水利用と環境利用の多様性

多民族が暮らす雲南国境地帯を事例として

Diversity in Water and Environment Usage in Rice Terrace Irrigation Systems:
Case Study of the Multiethnic Yunnan Border Region

西谷 大

NISHITANI Masaru

はじめに

①問題の所在と者米谷

②高寨・牛籠(ハニ族), 老白寨(クーツォン族)の棚田と灌漑システム

③考察

まとめ

【論文要旨】

調査地である, 中国雲南省紅河哈尼族彝族自治州に属する金平苗族瑶族傣族自治州者米拉枯族郷, 老集寨郷の者米谷は, 標高およそ2,000~3,000mの山地が連なり平地が占める面積は狭い。それだけでなく漢族以外の8つの少数民族が, 人口の大半を占めつつ混在して居住する地域である。各民族は標高およそ500mの河谷平野から, 標高およそ1,500mの山地の斜面にかけて異なった高度に住居し, 地形と気候の複雑さは多様な生態的な環境を生み出し, 各民族の生業戦略の差異につながってきた。

本稿では生業戦略の差異を, 灌漑用水路, 各棚田への導水の方法, 水田管理の方法などの要素によって比較を試みつつ, 各民族の灌漑システムの違いが, 環境利用, 生業戦略, 民族の歴史とどのような関係性をもっているのか検討した。

その結果, 者米谷では均質な環境利用と同質な生業形態を有した村が平均的に展開しているのではなく, 各民族・村単位がそれぞれに異なった生態的な環境を利用することで, 生業戦略に差異が生起していることが指摘できる。そして者米谷の生業システムの特徴は, 生態的な環境の差異, 環境利用の差異, そして生業戦略の差異という3つの差異性と, 市システムが絡み合いながら生業複合体を形成していることにある。生業複合体は, 村単位の自給自足的な生活世界を超えた生計維持システムによってささえられているのだが, その基本は, 各民族・村が生態的な環境の差異を, 差異のある生産物=商品に転化するという生業戦略にあったと考えられる。

【キーワード】 生業複合体, 棚田, 灌漑システム, 生業戦略, 環境利用

はじめに

これまで筆者は、中国雲南省紅河哈尼族彝族自治州（以下紅河州）に属する金平苗族瑶族傣族自治州（以下金平県）者米拉祜族郷、老集寨郷の者米谷⁽¹⁾において、棚田の灌漑システムについて論じてきた⁽²⁾。

者米谷は、標高およそ2,000～3,000 mの山地が連なり平地が占める面積は狭い。それだけでなく漢族以外の8つの少数民族が、人口の大半を占めつつ混在して居住する地域である。各民族は標高およそ500 mの河谷平野から、標高およそ1,500 mの山地の斜面にかけて異なった高度に居住し、地形と気候の複雑さは多様な生態的な環境を生み出し、各民族の生業戦略の差異につながってきた。

金平県者米谷の棚田を調査する目的について、棚田＝水田が地域の生態的な環境、各民族の生業戦略、民族固有の歴史とどのような関係にあるのかを探り、水田利用の多様性を明らかにすることを掲げた〔西谷2006a, 2007a〕。これはいいかえれば地域の生計維持システムを、棚田を通して構造としてとらえようとする試みである。このことが雲南の辺境に位置する一地域の稲作の展開史を理解するだけでなく、東アジアにおける歴史上の水田のもつ多様な利用の実態を解き明かす手がかりにもなると考えたのである⁽³⁾。

本稿ではこれまで分析の対象としてきた3つの民族（タイ、ヤオ、アールー族）の灌漑システムに加えて、さらにハニ族の2つの村（牛籠・高寨）とクーツォン族の村（老白寨）の棚田をとりあげる。そしてまず灌漑システムの差異がなぜ生じるのかを明らかにしたい。次に生態的な環境の差異から生起する、環境利用の違いが、棚田や水田利用そのものにも大きな影響を与えている姿について述べつつ、生業の多様性がどのような要因から創出されていくのかを探ってみたい。

①……………問題の所在と者米谷

1 問題の所在

雲南省の棚田といえば、調査地である金平に隣接する元陽県のハニ族の棚田が著名である。元陽県では唐の時代から棚田が拓かれたといわれ、棚田の総面積は現在およそ12万ヘクタールもあり、谷筋から標高およそ2000 mの山の斜面に棚田を作る。その景観は壮観で「ハニ族の雲の梯子」の美称でも呼ばれている。ハニ族の棚田は1980年代以降、中国国内だけでなく国外からも注目されるようになる〔史2002〕。

例えば、王清華は「高山の森林が育んだ溪流は、ハニ族によって山を巡り用水路へと引かれる。村に入った用水路は、棚田へと流される。田は連続し水路は縦横に走る。また泉からの水も、それぞれの棚田に引かれ、上から下へ田越しによって流され、その流れは休むことなく、最後に谷底の川へと流れ込む」と棚田と灌漑システムの概要を述べている〔王1991〕。棚田に関するこうした描写は、この地域の棚田の灌漑システムについて、ある一定の基本的な説明になっている。しかし棚田と灌漑システムに関する多くの記述は、概念化された場合が多い。また複雑な生態的な環境のなかでの灌漑システムの多様性や、ハニ族以外の民族の棚田や灌漑システムのあり方については言及されてこなかった。

こうしたなかハニ族の棚田を中心とした生業は、生態環境を破壊することなしに「自然との共生」を実践してきた、独自の「棚田文化」だと主張されるようになる〔王1999, 高2001, 雷2002など⁽⁴⁾〕。さらに侯甬堅は文献から棚田に関する記載を精査し、この地域の棚田の歴史は唐代までさかのぼることができる⁽⁵⁾と主張する〔侯 2007〕。そして山の斜面を垂直に利用するという方法は、この地域の少数民族が独自に築きあげた技術だと結論づけている。

このようにハニ族の棚田が注目されはじめた1つの要因は、1980年代以降、開放政策によって中国国内だけでなく国外の研究者やマスコミが、元陽県に足を踏み入れることが可能になったことがあげられる〔史 2002〕。さらに1990年代半ばから、ハニ族の棚田を世界文化遺産に登録する動きがはじまった。ハニ族の棚田、森の保全などに代表される自然利用の姿を、「自然との共生」や「資源の持続的利用」が原初からあったとのように画一的に表現される背景には、世界文化遺産登録という政治的な動きと密接に関係していると思われる⁽⁶⁾。しかし雲南省において棚田による稲作は、ハニ族だけがおこなっているのではない。例えば今回取り上げる金平県の者米谷ではアールー・ヤオ族を含む8つの民族が棚田による稲作をおこなっており、地域や民族などの違いによって棚田の実態もはるかに多様性がある。

近年、安達真平は元陽県において、棚田の詳細な調査をおこない、灌漑システムの多様性と生態的な環境の関係性、それに棚田の形成過程について述べている〔Adachi 2007〕。この地域では、ハニ族、イ族、漢族が棚田を作るが、1つの水系の棚田は、およそ上段はハニ族が、中段はイ族が、下段は漢族によって占められる。その背景には、灌漑水路の開削の技術、水量、この地域にそれぞれの民族が移住してきた歴史などが複雑に絡んでいると主張する。

棚田と水資源の管理には、歴史的な背景の研究が重要なのだが、昨今、碑文等による清時代の哀牢山地を含む雲南省南部の水利や生態環境に関する研究が進んでいる〔ダニエルス編 2008〕。それによると、元陽を中心とする棚田地域では民族移動による森林の開発利用をめぐる民族間の争いや、それに伴う環境劣化と保全策などの出来事が生起していたことがわかるという。今後、棚田の歴史を解明するには、フィールド調査と碑文を含む文献史料が相互に協力する必要がある。

また者米谷の棚田を含む各民族・村の生業は、現在も外部の市場経済や政治的圧力に対して適応するために常に変容し続けており、現在も彼らの固有の自然に対する知識にもとづいた試行錯誤を実践する場になっている。棚田研究のもう一つの目的は、彼らのいわゆる伝統的な人と自然の関係を記録に残すことだけではなく、外部のさまざまな圧力に対して自ら適応しようとするシステムの順応性を明らかにすることも含まれている。

こういった研究を進めていく上で、水田という生態系の動脈ともいえるべき棚田の灌漑システムに特に注目した。その理由は「水田耕作において水のコントロールが発達すると栽培の多様性がなくなり、単純化に向かうという一般則がみられ、多様性として残るのは栽培法ではなく、水のコントロールの多様性が残る」といわれているからである〔福井1980〕。

先に著した二つの論考では、カービエン（アールー族）、梁子瑤寨（ヤオ族）、上新寨（タイ族）の3つの村と民族の棚田をとりあげた〔西谷2006a, 2007a〕。3つの民族・村の灌漑システムには差異が存在するのだが、その要因はそれぞれの居住地域の生態的な環境と人口に関係していると考えられる。それだけでなく、棚田周辺の環境利用や棚田における他生業の内部化や、市場経済への関わり方、それに民族固有の歴史的な背景を含んだ生業戦略とも密接に関係しているのではないかと予想した〔西谷2006c, 2008〕。

本稿ではこれまで分析してきたカーピエン（アールー族）、梁子寨瑤二隊（ヤオ族）、上新寨（タイ族）の棚田以外に、高寨・牛籠（ハニ族）、老白寨（クーツォン族）の3つの村（2つの民族）を加えて、各村・民族の棚田を分析の対象とする。そして灌漑システムを灌漑用水路、各棚田への導水の方法、水田管理の方法などの要素によって比較を試みつつ、各民族の灌漑システムの違いが、環境利用、生業、民族の歴史とどのような関係性をもっているのかを抽出する。そしてなぜ各民族・村によって多様な水利用や環境利用が生起するのかを論じてみたい。

2 者米谷の自然的な環境と民族の多様性

調査地である金平県は雲南省の省都である昆明市からほぼ真南に位置し⁽⁸⁾、その南側の県境がヴェトナム国境と接している⁽⁹⁾（図1）。者米拉枯族郷、老集寨郷は、金平からさらに西におよそ100kmの地点にある。者米拉枯族郷、老集寨郷は、西北から南西に流れる者米川の河谷平野と、その南北に広がる山地から成りたっている。者米川の南が者米拉枯族郷であり、北側が老集寨郷である。者米拉枯族郷の郷政府は下新寨におかれているが、この町は一般には者米（以下この名称使用する）と呼ばれている。者米は漢語でジェーミーと発音し、タイ語の漢字表記である。本来はタイ語で「豊かな土地」という意味をもつ。一方の老集寨郷は老集寨街に郷の政府機関が所在する。

南北2つの郷をあわせると、東西およそ40km、南北およそ25kmの広さがある。河谷沿いの平坦な土地は南北幅が2～3kmと狭く、海拔およそ500m前後である。それに対して河谷平野の南北両側は急峻な山地がせまる⁽¹¹⁾。

4月の下旬から熱帯モンスーンの影響を受け、温度が高くなり降水量も増す⁽¹²⁾。現地では「十里不同天（10里離れば気候が異なる）」、「一山分四季、隔山又一天（1つの山でも季節は場所によって四季に分けることができ、一山越えればまた別の気候になる）」といわれるように、河谷平野と山地とでは気候の差が大きい。

金平県は14の郷があり、ミャオ・ヤオ・タイ・ハニ・アールー・ジョワン・クーツォン・漢族、それに民族とは認められていない2つの集団である、ハーベイ人、マン人の10民族が居住する⁽¹³⁾。2000年の第5次人口調査の統計によると、全县の人口は316,171人で、そのうち漢族を除く少数民族は86%を占める⁽¹⁴⁾。

者米拉枯族郷は、この名称が示すようにラフ族の支族であるクーツォン族が多く居住する郷である。郷の人口は18,512人（2002年の統計）を数えるが、そのうち5,525人がクーツォン族であり、ほぼ人口の3分の1を占める。クーツォン族以外に、タイ・ジョワン・ハニ・ヤオ・ミャオ族、そしてハーベイ人が居住するが、それぞれの民族によって居住に特徴がある（図2）。

者米谷の河谷平野に居住するのが、タイ族とジョワン族である。村の規模は600戸前後と大きい。者米谷で路線バスや一般の自動車の通行可能な主要幹線道路は、者米川南岸を走る公道だけである。タイ・ジョワン族の村は、こうした幹線道路沿いの、しかも山から流れる河川が者米川に合流する地点に作られている。

それより高い尾根上や山の斜面が、ハニ・ヤオ・クーツォン族が居住する地域である。者米拉枯族郷内のハニ・ヤオ・クーツォン・ミャオ族を平面的な分布からみると、ハニ族の村は、郷の西部と東部に集中する。その間にはさまれるように、クーツォン族の村が分布する。郷内におけるヤオ族の村は6村と少ないが、いずれも郷の東部に村が集中する。

郷内のミャオ族が居住する村は3村と、8民族のなかで最も人口が少ない。郷の東端に位置する



図1 調査地

幹線道路に村がある。ハーベイ人の村は、郷の東より、小翁幫川を2時間ほどさかのぼったところにある。ハーベイ族が居住する村は、1ヶ所である⁽¹⁵⁾。

者米川の北側が、老集寨郷である。この郷にはハニ族とアールー族が居住する。南の者米拉枯郷と同様にハニ族は西部と東部に分布し、それにはさまれるようにしてアールー族の村が散在する。このように者米谷全体からみると、ハニ族が西部と東部に住むものの、その中間地域では、者米河をはさんで北側と南側とでは居住する民族に違いがみられる。

このように者米谷は東西に長く狭い河谷平野と、その南北に広がる山地からなる複雑な地形を特徴としている。それにあわせて気候も多様である。本稿で対象とする村は、上新寨(タイ族)、カーピエン(アールー族)、高寨・牛籠(ハニ族)、梁子寨瑤二隊(ヤオ族)、そして老白寨(クーツォン族)の6村である⁽¹⁶⁾。各村は民族が異なるだけでなく、居住し利用する生態的な環境にも、均質的ではなくそれぞれに差異が存在するという特徴をもっている。

②……………高寨・牛籠(ハニ族),老白寨(クーツオン族)の棚田と灌漑システム

1 高寨の棚田と灌漑システム

高寨と牛籠はいずれもハニ族の村である。高寨は者米河の北側に、牛籠は南側に立地する。高寨は者米の町の西北方向に位置し、直線距離にするとおよそ3kmである。村は海拔およそ1,200mの地点にあり戸数は26戸で、人口はおよそ100人である。一方の牛籠は者米の町の西に位置し、直線距離だとおよそ3kmを測る。村は海拔およそ800mの高さに立地し、戸数は77戸、人口はおよそ300人を数える。高寨は者米河の北側にあるため、村が利用する大半の土地は、山の南斜面に展開している。それに対して、牛籠は者米河の南側にあるため村が利用する土地は、山の北側斜面に広がっている。

高寨のすぐ西には、海拔1,350mの高寨山があり、ここから東西に延びる尾根と、さらに南北に支脈が走る。村は山の頂上から東に下った尾根線上にあるが、村を基点として者米河の方向に3つの尾根が延びている。東から「東の尾根」、「中央の尾根」、「西の尾根」、東の尾根と中央の尾根の間の谷筋を「東の谷筋」、中央の尾根と西の尾根の間の谷筋を「西の谷筋」と仮に名づけておく(図3)。

高寨が利用する土地は者米河より北側で、山頂から東西に延びる尾根を下り者米河に至る稜線から南側と、反対に山頂から西の谷筋を下り者米河に至るラインの東側である。西の谷筋を流れる小河川が村境になっており、この川から西側は隣村の大寨が利用する土地である。村から高寨山までが、村の涵養林になっている。者米河の河川敷に広がる水田は、タイ、ジョワン族の村である巴義の所有であり、また者米河に面する南側斜面に展開するゴム林も巴義と下新寨(タイ族)の所有である。

高寨は東西に延びる尾根、南に向かって延びる2つの尾根、さらに2つの谷筋が一点に交わる地点に位置している。各尾根上には者米河までおりの道が作られている。谷筋は深く切れ込んでいたため、これを東西に横切っていくのは不便である。村が尾根と谷筋が分岐する扇状に開く接点に立地しているのは、稜線上の道を利用して尾根の斜面に広がる耕作地に行くのに便利なためである。いいかえると村は「扇の要の位置」を選択し、利用する土地は村を中心に扇状に広がっている。

棚田は25のグループに分かれるが、さらに高さ・立地・灌漑システムから、上部・中部・下部の3つの棚田地区に分類することができる(図4)。

上部の棚田地区

東の尾根の西斜面、および東斜面で海拔およそ800~950mの間に作られた棚田である(図4, No.1~5)。海拔が高いため、二期作は不向きで一期作しかおこなわれない。No.1~4グループの棚田の灌漑用水路は、東の谷筋の溪流からそれぞれ独立して引いてくる。

各棚田グループに水を灌漑するのに2つの方法を用いる。その1つの方法は、棚田の最上段から水をおとし田越しで下の水田に流していく縦灌漑である。もう一つの方法は、一筆ごとの水田に横方向から水をおとす横灌漑である。No.1, 3, 4は縦灌漑であるが、No.2は縦灌漑と横灌漑の2つの方法で水を供給している。No.2の棚田は38筆あるが、このうち第5~8段と第14~19段は畑(トウモロコシ等の栽培)に転用している(写真1)(2006年10月時点)。縦灌漑の田越しによる灌漑方法



図3 高寨が利用する土地と名称



図4 高寨の棚田

では、棚田の中間に位置する水田を一部だけ乾田化し畑にすることは不可能である。そのため横灌漑によって、畑にする棚田は乾田にし、水田にする棚田にだけ水を入れる方法をとる。

中部の棚田地区

中央尾根筋に作られた棚田グループで（図4, No.4~14, 写真2）, 海拔およそ650~800 mの間にある。上部の棚田地区よりも海拔が低く、No.4の棚田グループを除いて二期作が可能である（写真3）。

No.5, 13, 14の棚田グループは、東の谷筋の溪流から灌漑用水路を引く。それに対してNo.6~11, No.12の棚田グループは、西の谷筋の溪流から灌漑用水路を引いている。No.6~11の棚田グループは、南北に延びる尾根の西斜面と東斜面に広がる。およそ100 m離れた溪流から引かれた用水路は、尾根上の稜線に沿って流し、そこから分水木を使って各棚田に分水する（図5）。

各棚田に分水した水は、棚田の最上段におとされ、田越しによって下の水田へと導水する縦灌漑である。水の配分比率からみると各棚田グループには、No.6 = 11.6%, No.7 = 6.0%, No.8 = 7.7%, No.9 = 13.9, No.10 = 16.6%, No.11 = 44.2%の比率によって分配される。この配分率は、1980年代初頭にはじまった生産請負制時における各家の成人労働者数を基準としている。そして1人あたりの水の配分率は3.0%~4.0%に収まるように計算されている（表1）。水の配分量を水田の面積ではなく、各家の労働人数によって決定する方法は、カービエンと同様である。

表1 中部の棚田地区の水配分

水田番号	水の配分率	分配人数	1人分の配分量	面積 (㎡)	ha	水1%
6	11.6	3	3.87	3934.92	0.39	339.22
7	6.0	2	3.00	3871.56	0.41	645.26
8	7.7	2	3.85	2332.77	0.23	302.96
9	13.9	4	3.48	6661.38	0.67	479.24
10	16.6	5	3.32	7260.99	0.73	437.41
11	44.2	11	4.02	16019.19	1.6	362.43
	計 100.0%					

下部の棚田地区

中央谷筋の出口で、者米河に接した扇状地とその周辺に広がる棚田である。海拔およそ565~600 mの緩斜面に広がっており、二期作が可能である（写真4）。

灌漑システムからみた場合、下部の棚田地区は、西の尾根の東斜面に広がる棚田グループ（図4, No.15~17）、中央の谷筋の先端に広がる扇状地上の棚田グループ（No.18~22）、扇状地の東側の緩斜面に広がる棚田地区（No.23~25）の3地区に分けることができる。

西の尾根の東斜面に広がる棚田グループの水源は、およそ1km離れた西の谷筋にあり、ここから灌漑用水路を引いている。用水は棚田の西側に設置されたNo.VI分水木によって3つに分けられ、No.5~17の3つの各棚田グループに縦灌漑によっておとす。

扇状地上にあるNo.18~22の棚田グループへの灌漑用水路は、およそ200 m離れた東の谷筋の溪流から引いており、用水はNo.VII分水木によって4等分され、No.18~21, 22の4つの棚田グループに縦灌漑によっておとす（図6）。

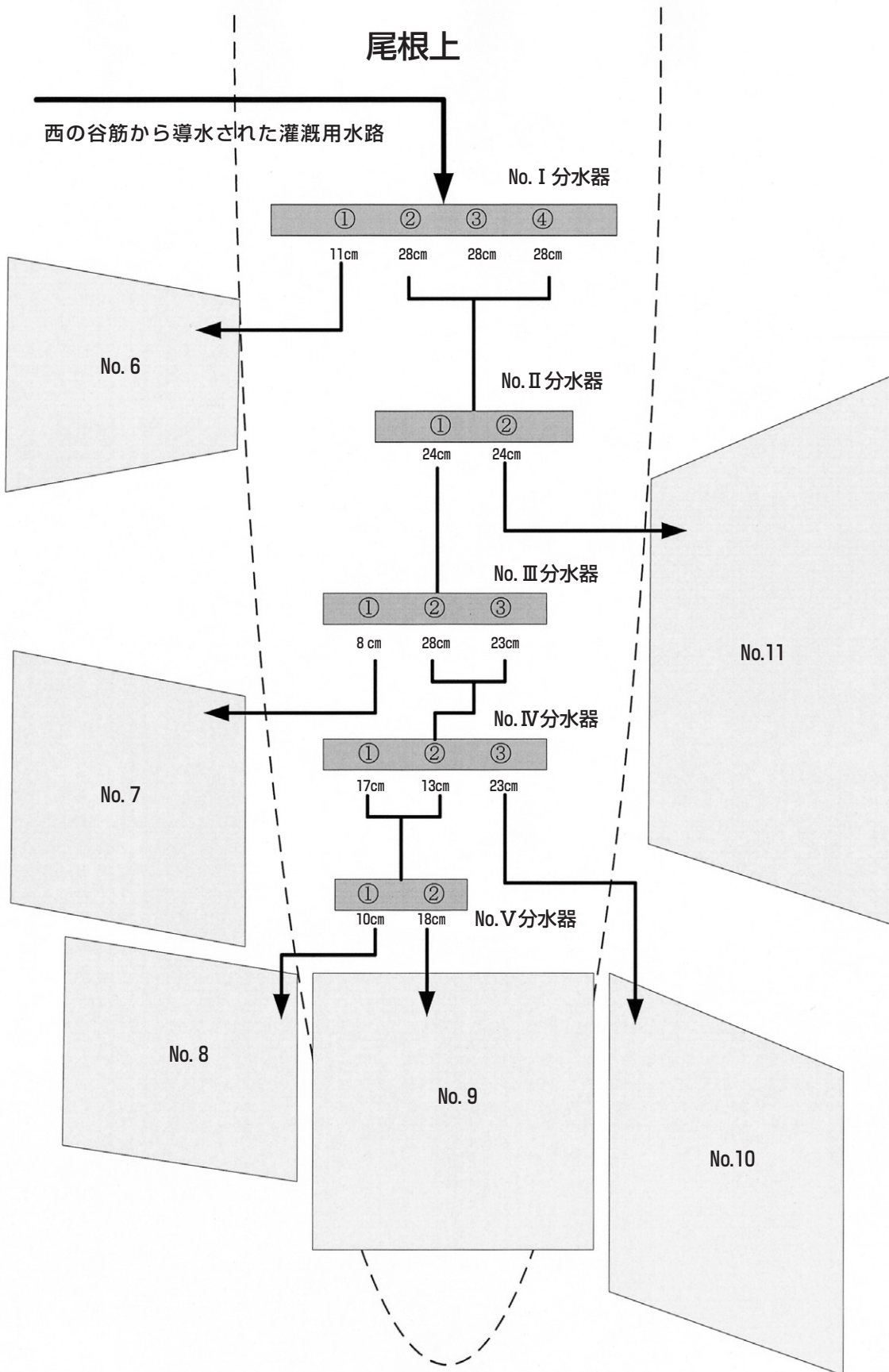


図5 中部の棚田地区

No.23とNo.24の棚田グループの灌漑用水路も、東の谷筋の溪流を水源としている。灌漑用水路はおよそ100mで、用水をNo.VIII分水木によって2等分し、縦灌漑によってNo.23とNo.24の棚田グループにおとす。

No.25の水田は東の溪流を水源とせず、東の尾根の湧水を利用している。

2 牛籠

牛籠の村人が利用する土地は、背後の山の斜面（およそ海拔1000mの地点）から、者米河に向かって北に延びる舌状の尾根と、その東と西を流れる溪流にはさまれた範囲と、川沿いの緩やかな傾斜地である（写真5）。尾根の斜面は斜面畑として利用され、集落より高い山の斜面は水源涵養林になっている。集落は舌状に延びる尾根が平坦になる、およそ800m付近に位置する（写真6）。

村の水田は者米河に沿った緩斜面、村の北側の尾根筋上、そして尾根の西と東の谷筋を流れる溪流沿いという3地区に分けることができる（図7）。

者米河に沿った緩斜面地区

者米河の南岸の緩斜面地に作られた棚田である（No.1, 2）。No.1の水田は、東の溪流から用水路によって引いてきた水を、最上段からおとし田越して水を灌漑する縦灌漑である。No.2もやはり縦灌漑であるが、灌漑用水は水田の近くの湧水を利用している。この2つの水田の北側と、者米谷を東西に走る道路の間に水田が展開していたが、2004年にバナナ畑に転作した。

村の北側の尾根筋上地区

No.13～23の水田グループで、村の北側の尾根筋から斜面にかけて広がっている。この棚田グループに供給する水は、東灌漑用水路と西灌漑用水路（仮に名づけておく）の2本の用水路によってまかなわれている。

東灌漑用水路は東の溪流を村からおよそ500mさかのぼった地点から取水し、村の東を走りNo.13の棚田のすぐ近くまで導水する。西灌漑用水路は西の溪流をおよそ700mさかのぼった地点から取水し、村の西側を通過してNo.13の棚田の脇で東灌漑用水路と合流する。合流した灌漑用水路は、No.13水田グループの最上段に水をおとした後に、No.14の棚田の近くで2つに分水され、その1つはNo.14～18の棚田グループの間をぬうようにして、それぞれの水田グループの最上段から縦灌漑で水を供給する。

分水された用水路は下の道路から村に通じる道路沿いに沿って流され、No.20～23の棚田グループに、いずれも最上段から水をおとし、縦灌漑によって水を供給する。

またこの道路沿いを走る用水路は降水量が多くなり、No.13～19への水の供給量が過多になる場合に、水を排水する役目も担っている（図7の点線部分が排水路の役目をもつ）。

尾根の西と東の谷筋の溪流沿い地区

この地区の水田は、谷筋の溪流沿いに広がっているため低湿地で、12～3月の乾季の期間、灌漑をしなくても水田に水が残る（写真7）。灌漑には溪流から直接水を引く方法と、山の斜面を流れる細水を利用する2つの方法がある。東の谷筋の溪流沿いを例にとると、No.3, 4, 10, 12の棚田が溪流から導水する。No.5, 6, 7, 8, 9が細水を利用して灌漑する棚田である。これらの棚田は、

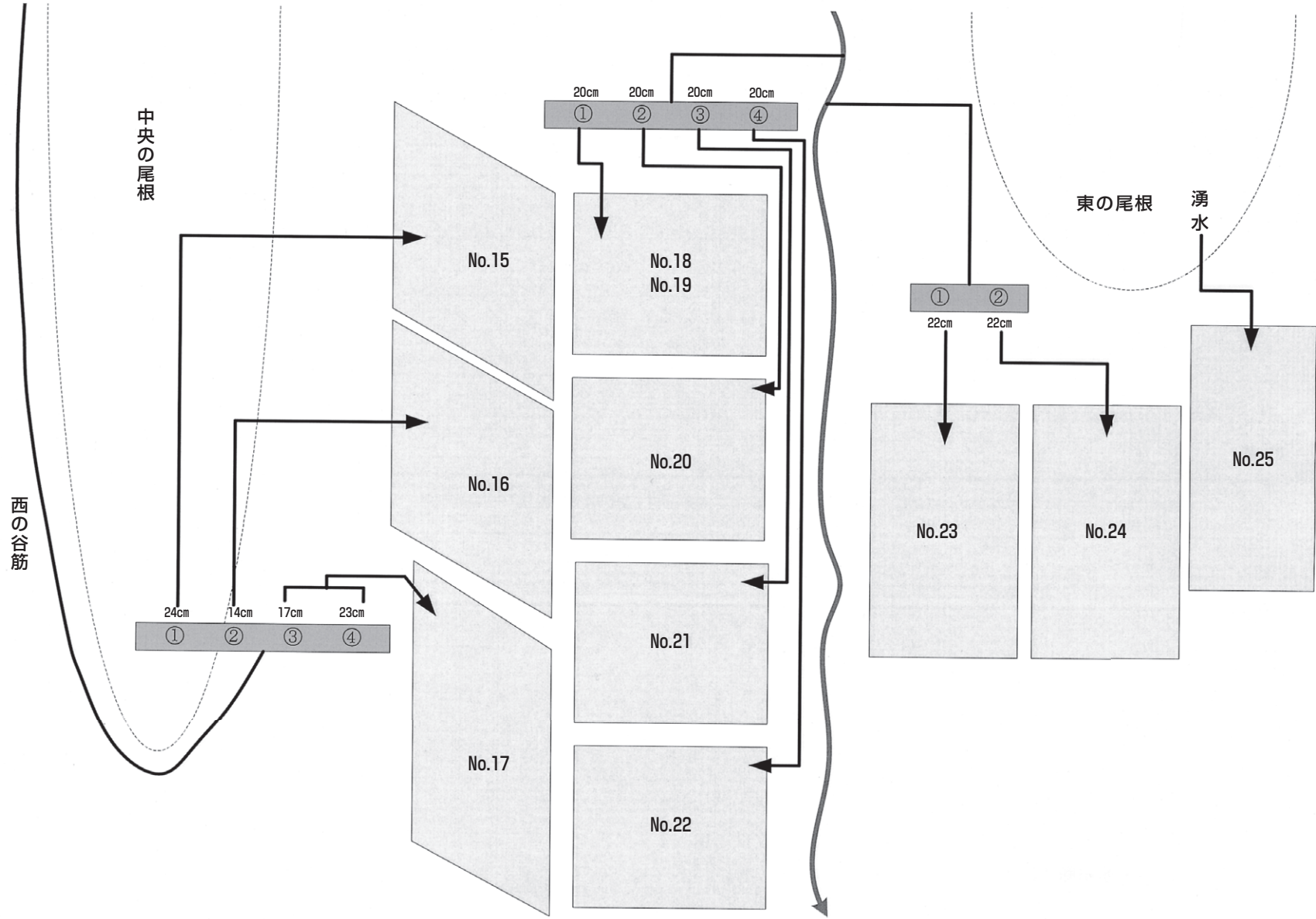


図6 下部の棚田地区

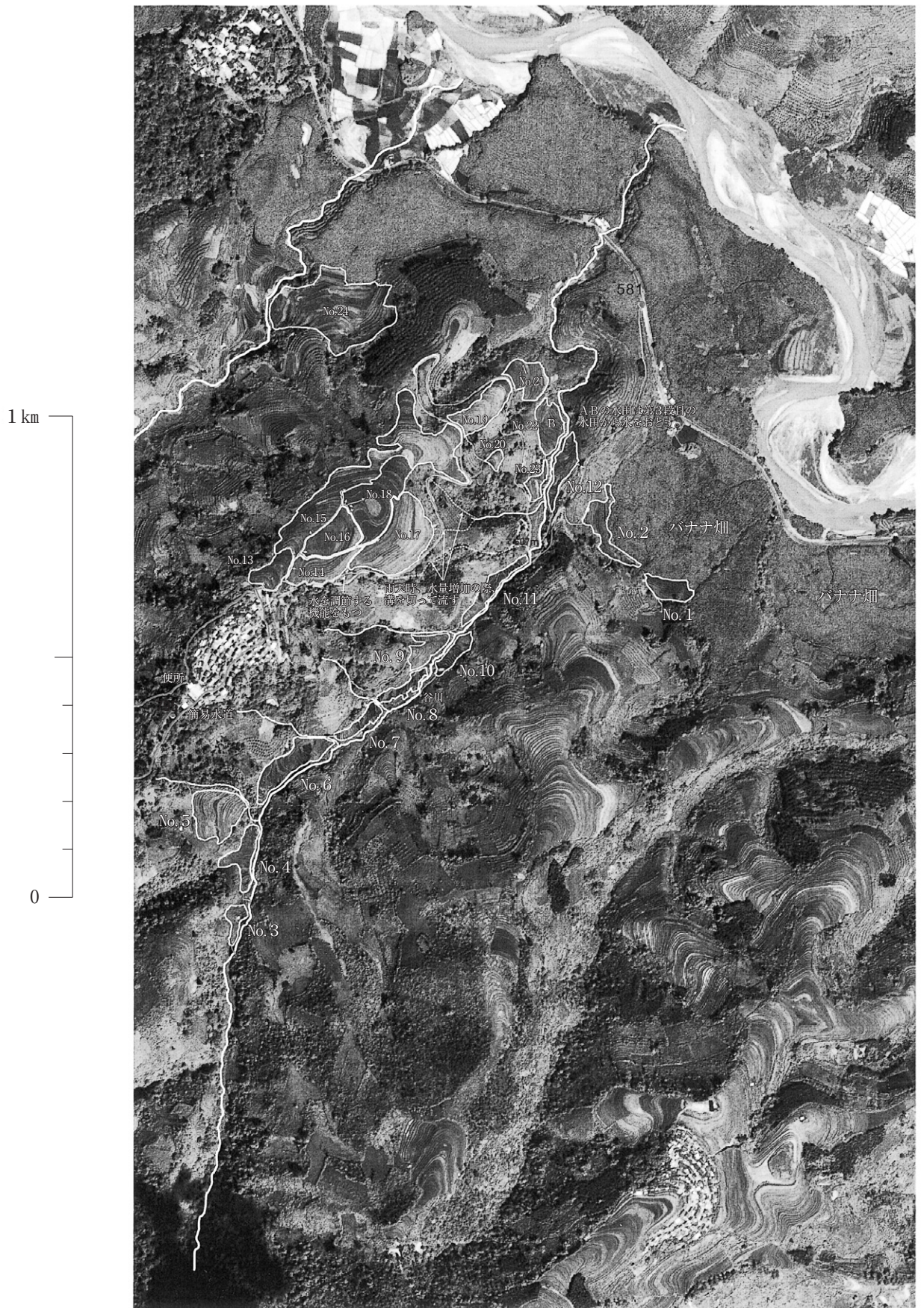


図7 牛籠の水田と灌漑システム

いずれも村の北側の尾根筋上地区の棚田と比較すると、一筆ごとの水田面積が狭い。

3 老白寨(クーツォン族)の棚田と灌漑システム

クーツォン族の村は、者米河の南側に展開している。クーツォン族はラフ(拉枯)族の一支族であり、者米拉枯族郷の名称が示しているように、郷内ではクーツォン族の人口が最も多い。者米谷におけるクーツォン族の歴史は、1930年代にヴェトナム方面から脊梁山地を越えて中国側にやってきたときからはじまる。1950年代まで、海拔およそ1,300m以上の山地に住み、焼畑と狩猟採集を生業としてきた。しかも短期間で、耕作場所をかえる移動型焼畑農耕民だった。1960年代に農業の集団化が実施された時期に、山から強制的に移住させられた。「六六新寨」「六七新寨」などは、名前が示すようにこの時期に移住し新しく建設した村である。ところがクーツォン族は1982年からはじめた生産請負制によって、政府の強制的な定住政策の圧力が弱くなると、その多くは河谷平野沿いの新しい村を離れ再び山の上に居住し、焼畑を主とする従来の生業にもどった。

1990年代の後半になって、政府は再び移住政策を開始する。特に1998年からは「155工程」という「扶貧政策」が実施された。この政策は、1万人の貧困なクーツォン族⁽¹⁷⁾に対して、5年間で5千人を貧困状態から脱出させるという内容である。具体的には従来の焼畑で、陸稲、トウモロコシ、キャッサバに頼っていた生業を、水田によるコメの自給と換金作物の植え付けを奨励することにある。そのため水田の開墾が難しい山地から、村そのものを河谷平野に近い尾根筋上に移転する。新しい村の建物、水道施設、電気設備などに必要な経費はすべて政府が出資する。さらに水田の開墾とコメの植え付け技術や、農具類や肥料なども援助している。者米の南側に点在する下納咪、下新竹寨、上新竹寨といった村は、いずれもこの政策によって新たに建設した村である。

このようにクーツォン族の生活世界は、居住する場所を移転しただけでなく、生業スタイルも政策によって大きく変容してきた。者米谷に居住する民族のなかでは、クーツォン族の生活世界が最も激しく揺れ動いてきたといえる。

者米谷の各民族の生業とその関係性を探る上で、クーツォン族が従来おこなってきた環境利用と生業の具体的な姿を把握しておく必要がある。そこで老白寨(クーツォン族の村)をとりあげたい。この村は政府の政策である河谷平野沿いへの移住に従わず、焼畑をおこないつつ、新たに水田も自らの生業に取り入れることで外部の変容に独自の生業戦略で対処している。

老白寨は者米の南に直線距離にしておよそ8kmに位置する。村は海拔およそ1,600mの地点にあり、者米からだ山をぬうようにして登っていくため徒歩でおよそ5時間を要する。戸数は30戸で、人口はおよそ130人を数える。村の名称は、地図上および者米の町では「老白寨」が通称だが、自称は「ラボカ」という。「カ」が村という意味である(写真8)。

村が利用している土地は、南北およそ6km、東西およそ3kmの範囲で、山が周囲を取り囲む南北に長い谷状の地形である(写真9)。村から南におよそ3kmには東西に走る海拔およそ2,000mの脊梁山地が走り、これがヴェトナムとの国境になる。谷の中央を南から北に溪流が流れ、谷の北の出口で滝となって流れおちる(写真10)。村の棚田は溪流沿いの周囲に広がる、海拔およそ1,300~1,500m間の斜面に展開している。

周囲の尾根から谷に向かって延びる尾根は、いずれも幅が狭い上に尾根上にいくつもの小山を作る(写真11)。そのため棚田に適した広い面積をとれる斜面地がほとんどない。棚田はごく狭い緩斜面の一部分か、小山と小山の間にできたコルに作られる(写真12)。老白寨の棚田は海拔が高い

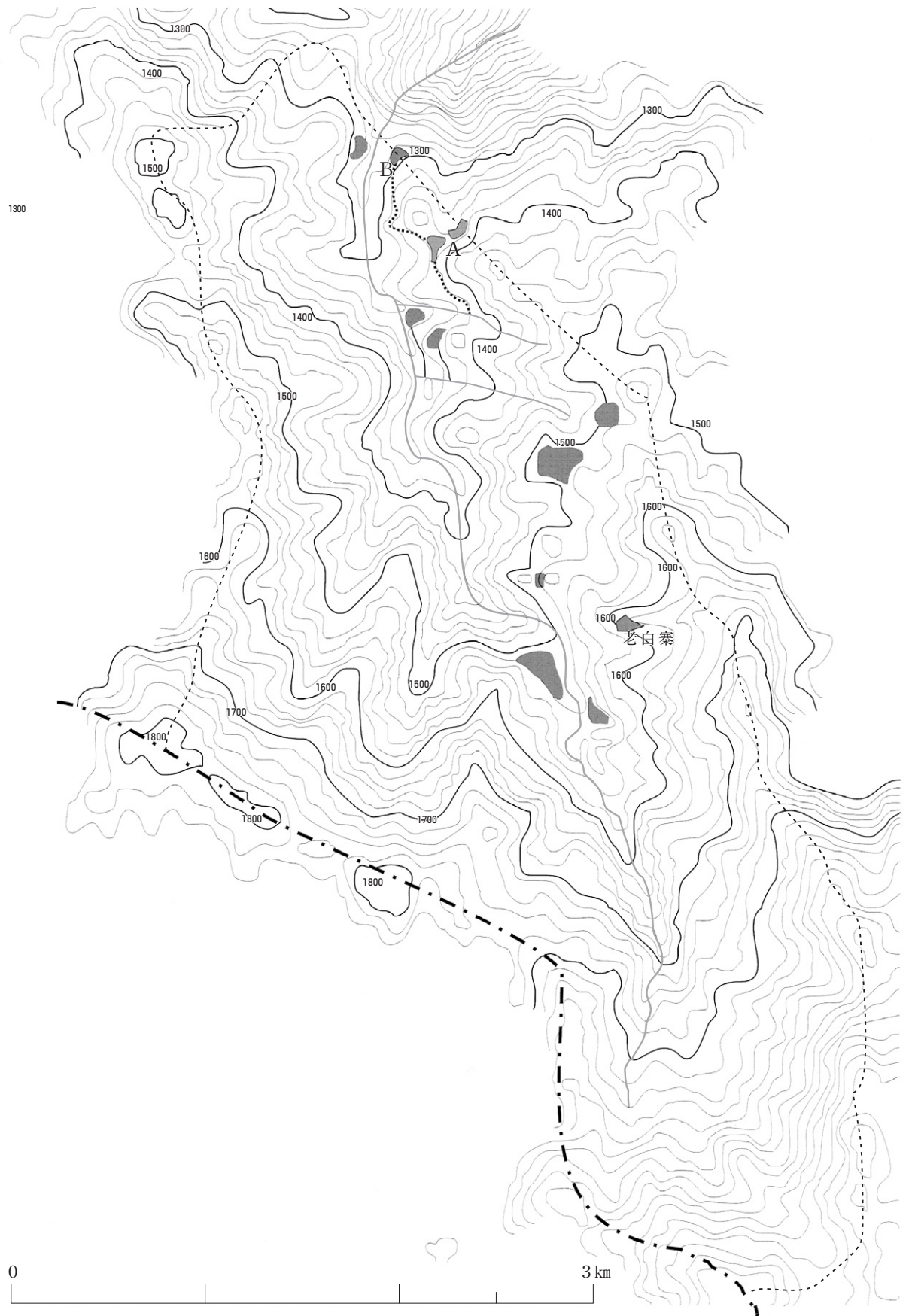


図8 老白寨の棚田と灌漑システム

ため二期作は不可能である。また河谷平野沿いで植えられているハイブリッド米も生育に適さず、現在でも在来種を植えている。

すべての棚田は、山から流れる細流を灌漑用水としており、谷の中央を流れる溪流の水は利用しない。灌漑の方法には2つのタイプがある。1つのタイプは、細流をそのまま棚田の最上段におとし、縦灌漑で水を流していく方法である。

もう一つの灌漑は、コルに作られた棚田でおこなわれる方法である。図8のA水田は、コル上に作られているが、この水田の取水口は、およそ南に500m離れた谷筋を流れる細流にある。ここから灌漑用水路によって導水し、まずA水田に縦灌漑で水をおとす。A水田を通った水は、棚田の最下段の尻口から排水されるのだが、この水は再び灌漑用水路によって、北におよそ400m離れたB水田まで導水される。

このような方法をとるのは、細流の水量が少ないためと、地形的に急斜面が多く棚田に適した緩斜面が少ないことが理由だと考えられる。つまり少ない水を灌漑用水路によって、棚田を作ることが可能な地点から地点へとつないでいく、いわば「灌漑リレー方式」に特徴がある。

河谷平野沿いに移住し政府の援助によって作られた棚田は、基本的にはタイ族が雇われて彼らの技術で作った。例えば者米の南側に移住してきた、小白村、下納咪、上良竹寨、下良竹寨の棚田は、いずれも北に延びる尾根上の緩斜面上に造成され、政府の援助によってコンクリート製の灌漑用水路が施設されている。一方、老白寨の水田は、10年ほど前から村人が他の民族の棚田を参考にしながら開田したという。

③……………考察

1 灌漑システムの差異

各民族・村の灌漑システムの特徴について、供給している水量を比較しながらまとめておく。方法は、各村において田植え直前の最も水を必要とする時期を選び、灌漑用水路によって供給される水量を量った。さらに各村の水田面積を測り、1m³の水量で灌漑している水田面積を比較した(表2)⁽¹⁸⁾。表において、数値が低い村ほど水1m³の量で灌漑している水田面積が狭く、水量が豊富なことを示している(上新寨、カービエン、梁子寨瑤二隊については、註7及び西谷2007a, 2007cを参照)。

6つの村を比較すると、棚田に水量を最も豊富に供給できるのは上新寨(タイ族)である。その水田の特徴は河谷平野沿いの緩斜面に広がっており、谷筋の小河川の豊富な水を利用し、しかも取水口から水田までの距離は数十m以内と短く、灌漑用水が不足することはない。灌漑用水量が豊富なため水田への灌漑方法は、たとえそれぞれの田の所有者が異なっても田越しによって水を流し入れる縦灌漑で、管理維持費は各家が所有する水田面積に応じて徴収する。灌漑水路の開発と維持は村単位で共同しておこなう(図9)。

2番目に水量が豊富なのが、牛籠(ハニ族)である(表2)。村は海拔およそ800mに位置し、水田はそれ以下の尾根の緩斜面や谷筋に展開している。棚田グループを1つの単位として縦方向に並べて作るのを特徴とし、特に尾根上から斜面にかけての緩斜面では、上から下に向かってパッチ状に組み合わせながら展開させていく(図9)。縦灌漑によって水を供給するが、灌漑用水量が豊富なため、むしろ棚田に供給する水が過多になった場合に備えた排水路を設備している。



写真1 高寨の上部の棚田地区



写真2 高寨の中部の棚田地区



写真3 高寨の中部の棚田地区の田植え



写真4 高寨の下部の棚田地区



写真5 牛籠を北からみる。



写真6 牛籠。村の北側に棚田が広がる



写真7 牛籠の谷筋の棚田

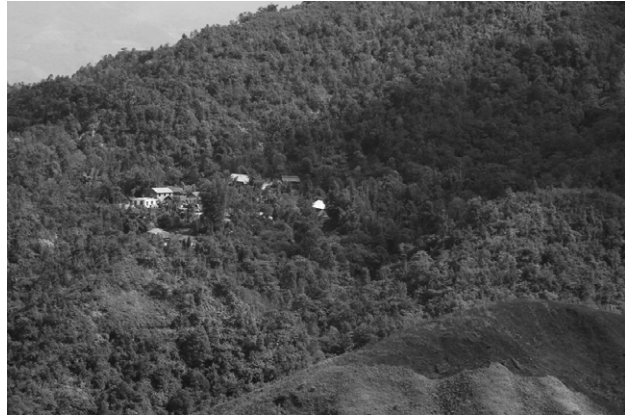


写真8 老白寨



写真9 老白寨の谷状の地形。奥の山の稜線がベトナム国境になる。



写真10 老白寨の北の村はずれの滝

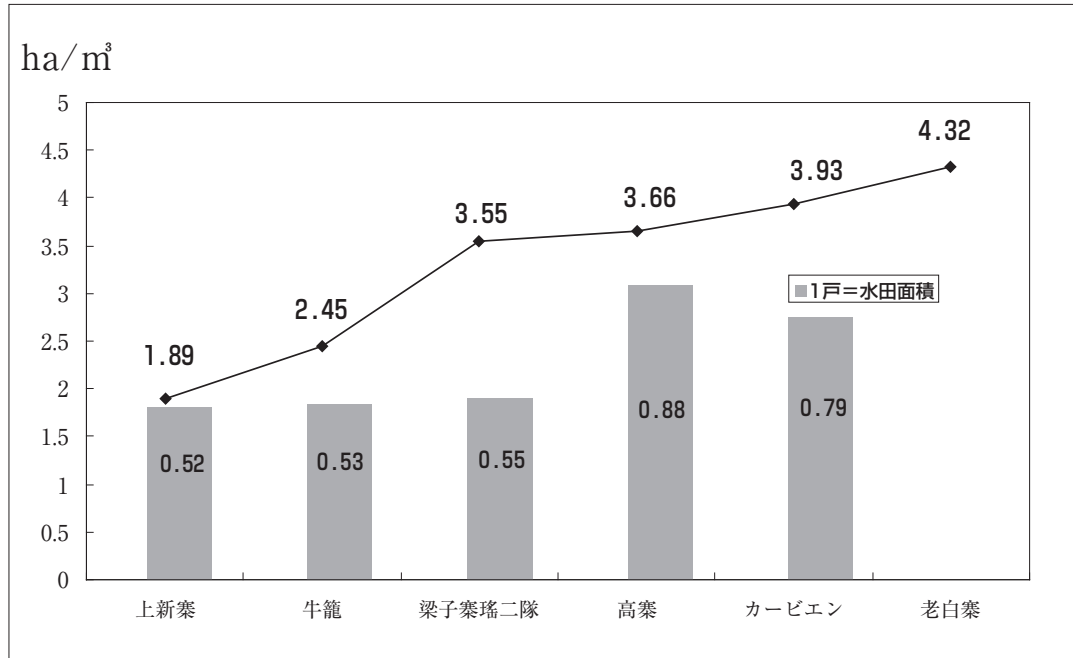


写真11 老白寨の尾根がおりなす景観



写真12 老白寨の緩斜面とコル上の棚田

表2 用水の灌漑面積と一戸が所有する水田面積の関係



棚田に供給する水量が3番目に多いのが、高寨（ハニ族）と梁子寨瑤二隊（ヤオ族）の2つの村で、ほぼ同じ数値を示す（表2）。しかし河谷平野沿いの上新寨が供給している水量と比較すると、およそ半分でありはるかに少ないことがわかる。高寨は牛籠と同様にハニ族の村であるが、牛籠よりもおよそ300m高い海拔およそ1,100mに位置する。高寨は牛籠と同様に水田を尾根の緩斜面や、谷筋に沿って縦方向に並べて作る。しかし高寨では中部と下部の棚田地区で分水木を使った灌漑システムをもつものに対して、牛籠は分水木を使わない（図9）。このようにハニ族は水田グループを縦方向に並べながら、棚田を作っていく方法をとるのだが、水量の差異によって灌漑システムが異なっているといえる。

梁子寨瑤二隊の棚田は、尾根の斜面の一部を使うだけであり、カービエンの棚田にみられる尾根全体を開発することはおこなわないし、その規模ははるかに小さい。また棚田へは各家がそれぞれに灌漑水路を引き、上新寨やカービエンでみたように用水路を村単位で共同に開発することはない（図9）。水源は、湧き水・斜面を流れる水・谷筋の溪流という3つに頼るが、用水路の長さは1kmを超えることはない。1グループの棚田を1家族が所有している場合は、田越しで水を各水田に流していく。しかし、1グループの棚田内に異なる家族が水田を所有している場合は、灌漑水路から各家の水田に直接水路を引き、水田の横方向から水を直接おとす方法を取り、田越しによる灌漑はおこなわない。つまり縦灌漑と横灌漑が併用しておこなわれている。そして棚田や灌漑水路は各家族単位で作られ維持されており、村単位で共同に開発することはない。

カービエン（アール族）は、者米谷で最も壮大な棚田を作る。しかし水田に供給できる水量は、上新寨と比較すると半分以下である（表2）。棚田は村の周囲に広がる尾根上の先端と両側の斜面に広がる。尾根を横に使い水路状の水田を作りながら、その水田を縦方向につなげ斜面全体に棚田を展開する。そして比高差が数百メートルもある棚田グループを、わずか4～5年という短期間で

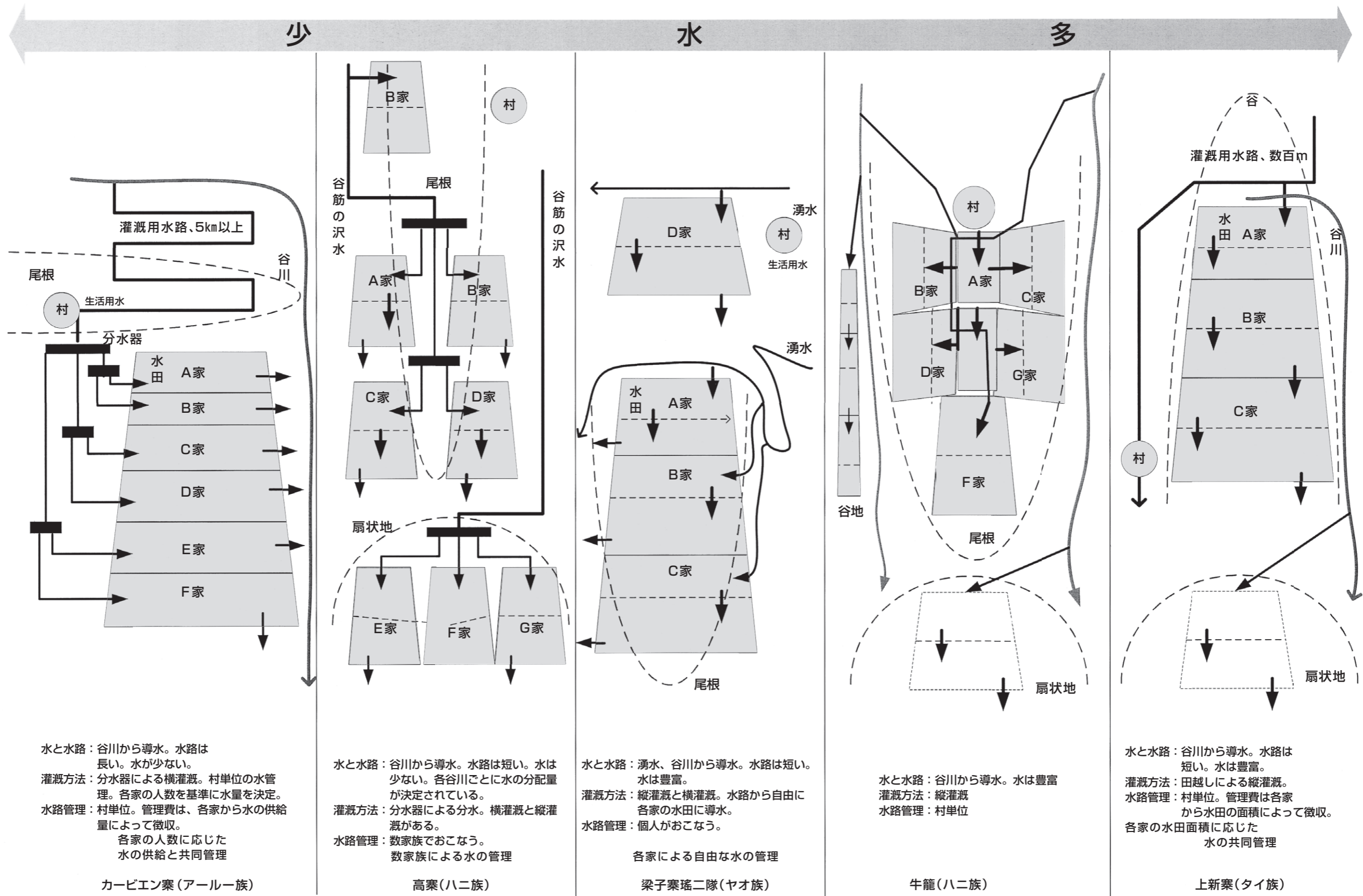


図9 各村の灌漑システム

作りあげる技術をもっている。灌漑方法は尾根の東を流れる河川から5km以上の長い灌漑用水路を引いて導水する方法と、尾根の斜面の湧水や、上部に位置する棚田の伏流水を利用する方法に分けることができる(図9)。

棚田と灌漑用水路の開発は、村民が共同しておこなう。水路状の水田を呈しており、長いものはおよそ400mにも達する。水田への導水は、分水木を使った複雑な分配システムを備えている。分水木の役割は、まず尾根上から斜面に広がる4つの区画の棚田に、決められた分量の水を分けることである。次に横灌漑によって、各グループ内の一筆ごとの水田にも一定量を導水する役割をもつ。そして水の分配量は、各家の労働人数を基準にして厳格に規定されている。

また分水木に穿たれた溝は、水路の水量が少ない場合には自動的に水を一定量に分配する役割をもつが、反対に水量が豊富で溝よりも水位が高い場合には、水を分配する機能は停止することになる。つまり分水木を利用した水分配システムは、渇水期にいかにも水を厳密に管理し、水を無駄なく公平に分配するかを最大の目的としている。さらに灌漑用水路の維持・修復は、各家から水の分配量の基準になる各家の労働者人数に応じて管理費を徴収し、村で決めた管理担当者に委託する。つまり水が常に不足状態であるため、水の分配・管理もすべて水の量が基準になっている。このようにカービエンでは、水量の少なさが水田利用と水の管理をめぐる、村を単位とした強い共同性と深い関係にあることが指摘できる。

そして6つの村のなかで最も水量が少ないのが老白寨である(表2)。水田に適した土地が少なく、緩斜面と小山の間のコル上に棚田を作るがその面積は狭い。灌漑方法の特徴は水量の少なさを補うため、水路で棚田と棚田つなぐ「灌漑リレー方式」を編み出していることである。このように6つの村では、棚田の立地、灌漑方法、灌漑用水路の長さ、棚田・水路を開発する単位、用水路の管理方法、管理費の徴収方法がそれぞれ異なっている。

2 生態的な環境の差異と特定的な利用

各村の棚田は、外面的には均質的にみえるのだが、灌漑システムからみるとそれぞれに特徴がある。これは地形と水量が大きく影響しているわけだが、当然のことながらコメの生産量とも深く関係している。

6村のなかでハイブリッド米が導入される以前でコメの自給が可能だったのは、海拔およそ800mラインより低い位置に水田をもち、しかも二期作が可能な上新寨と牛籠である。一期目のコメは余剰米として市で売り、二期目で収穫されたコメは自給用に回すという生業戦略をとってきた。

牛籠と同じハニ族の村である高寨は、水田に適した緩斜面は少なく、また水田に供給できる水量も少ない。そして海拔およそ800mよりも低く二期作が可能な棚田と、これよりも高く一期作の棚田に分かれる。1990年代以降は、者米谷にもハイブリッド米が導入されコメの収穫量は増大した。しかし高寨では、1980年代以前は在来種を植えていたため収穫量は少なく自給するまでには至らず、トウモロコシなどを栽培したり市でタイ族からコメを買っていたという。

大寨、阿扎、金竹寨など、高寨の北の尾根上に点在するハニ族の村は高寨と同様に1,000m以上の高い位置に村があり、水田の一部が800m以上に展開し、しかも灌漑用水の水量に制限があるため分水木を使った灌漑システムをもつ。一方、格馬(ハニ族)は、牛籠と同様に水田が海拔およそ800m以下に展開し、しかも分水木を使わない。このような灌漑システムをもつ村は、者米河の南側に展開する。

ヤオ族は者米谷の南側斜面に居住するが村の周囲に森林が残っているだけでなく、その背後には大冷山（海拔2,506 m）や西隆山（海拔3,074 m）が連なり、西隆山周辺には原生林も残っている。しかし水田はすべて800 m以上にあり水量は河谷平野と比較すると少なく、一期作が中心である。またハイブリッド米が導入される以前は、焼畑で陸稲も栽培し、コメが不足した場合には市でコメを購入していた。

アール族の住む尾根には、森林はほとんど残っていない。尾根に切れ込んだ深い谷筋で、人が踏み込めない急斜面に、わずかな灌木林が残っているにすぎない。尾根筋から流れおちる湧水の量は限られており、水は常に不足状態のため長い灌漑水路と精緻な水分配システムが必要不可欠だといえる。しかも棚田は海拔およそ800 m以上にあるため、ほとんどの水田で一期作しかできない。

水量と灌漑水路の管理の関係をみると、水が豊富な上新寨では、灌漑水路の維持管理費は水田面積が基準になるのに対して、カービエンでは水の分量によって厳密に管理されている。このことから水の量が灌漑システムの差異に大きな影響を与えているといえるだろう。水が不足する条件下で田越しによる縦灌漑をおこなえば、水の供給は上に位置する水田が有利になる。カービエンは水不足の問題を、各家の水田に個別に水を分配する精緻な横灌漑システムによって解決している。一方、上新寨は1つの水田区域内において、たとえ上下の水田の所有者が異なっても田越しによる縦灌漑をおこなうのは、水が豊富なことが最大の要因だといえる。

また灌漑水路と村の位置からも、各村での水条件の違いが指摘できる。上新寨では、取水口と村落の間に水田区域がある。水量は水田の灌漑に使っても十分に余裕があり、用水路を最後に村落に引き込んで生活用水に使用している。また梁子寨瑤二隊では、用水路はそれぞれの棚田に付属しており村の近くを通ることはない。梁子寨瑤二隊での生活用水は、村が位置する丘陵上から30 mほど下ったところにある湧水を利用している。

ところがカービエンでは、河川から引いてきた灌漑水路を、まず村の近くを通るように設計してある。用水を各棚田区域に分配する地点の上流側は、水溜まり状になっている。村人は、ここでアヒルなどを飼うだけでなく洗濯や野菜などを洗う。カービエンでは灌漑用水を一度生活用水として活用してから、棚田へと分配する仕組みになっている。つまり上新寨では灌漑に使った水を生活用水に使い、カービエンは生活用水に使った水を灌漑に使う。これも水が常に不足しているカービエンで、水を節約して使うために編み出された工夫の1つだといえるだろう。

者米谷においては牛籠と高寨だけでなく、ハニ族の棚田の作り方は、斜面状に水田グループを縦方向にパッチ状に連続させていく方法をとる。これはアール族が、横方向に水田を拡張していくのとは対照的である。しかし水が豊富な牛籠では、縦灌漑によって分水木を使わず供給するのに対して、高寨ではアール族と同様に分水木を使って水を配分するという方法をとる。

各民族・村が利用できる水量は、居住する場所によってそれぞれに差異があるのだが、そのことが多様な灌漑システムを生起させる要因になっている。そして水が豊富になると灌漑システムそのものは単純化し、水が不足すると灌漑システムが複雑化するという傾向が指摘できるだろう。

また用水が灌漑する単位面積と、1戸の平均水田面積を比較すると、水が豊かでコメの生産量が高い上新寨や牛籠の方が、水の供給量が少ないカービエンや高寨よりも狭いことがわかる（表2）。つまり1戸あたりの水田面積が広くなるにつれて、コメの生産量が高くなるという相関関係は成立していない。その要因は、河谷平野では灌漑用水量が豊富で、しかも水田はすべて海拔およそ800 m以下で二期作が可能なることに関係している。つまり河谷平野では、狭い面積でも集約的な水田稲

作が可能で生産量が高いのだといえる。

ところで梁子寨瑤二隊でおこなわれている縦灌漑と、上新寨の縦灌漑の方法は全く同じである。しかし梁子寨瑤二隊とカービエンでおこなわれている横灌漑は、水田の横方向から水を入れることでは共通しているが、水の分配方法からみると全く異なっている。カービエンの横灌漑は分水木を使って、1筆ごとの水田へ決められた水の量を、厳密にしかも自動的に調節して配分するシステムである。しかし梁子寨瑤二隊の横灌漑は、灌漑用水路から各家が自由に水路を水田まで引いて水をおとす方法をとる。水田の横から水を入れる方法は共通するのだが、水量は各家が自由に調節できる。つまり梁子寨瑤二隊は、たとえ連続した雛壇状の棚田であっても、水田・灌漑用水路を所有者ごとに独立して管理・維持している。いかえればカービエンの灌漑システムは、村を単位とした共同管理を基礎としているのに対して、梁子寨瑤二隊の場合は、各家が1つの独立した単位になっている⁽¹⁹⁾。

者米谷の水田は海拔およそ800 m以下では二期作が可能であるが、それ以上では一期作しかできない。そのことは温度だけでなく、利用できる水量の差異と深く関係している。つまり者米谷の生態的な環境の多様性と、さらに各民族の歴史性が絡み合い、灌漑システムと水田利用の多様性と差異性を生み出していると考えられる。

まとめ

灌漑システムの差異から、各民族・村が利用する、生態的な環境の差異について考察してきた。者米谷では生態的な環境が多様で、高さと平面的な場所の条件によって差異が生じる。各民族・村は、河谷平野から山までを網羅的に利用しているのではなく、棲み分けをおこなうことで、生態的な環境の利用に明確な差異性が生じている。そのことが灌漑システムの多様性と深く関係しているといえる。つまり者米谷では均質な環境利用と同質な生業形態を有した村が平均的に展開しているのではなく、各民族・村単位がそれぞれに異なった生態的な環境を利用することで、生業に差異が生起している可能性が高い。

生態的な環境の差異と生業の差異という、このこの両者の関係性をより深く理解するには、棚田だけでなく他の生業との関係性も明らかにする必要があるだろう。筆者はこれまで、各民族・村の土地利用を明らかにしてきた〔西谷2008〕。そこで、各民族・村の生態的な環境と生業の差異について述べ、次いで者米谷が各民族・村単位の生業戦略が組み合わさって、1つの生業複合体を構成している様子を描いてみたい。最後にこの生業複合体を維持している、定期市との関係性について述べたい。このような思考を経ることで、灌漑システムを通じて抽出した生態的な環境の利用の差異性が、各民族・村の生業に差異を生起させている実態を、より深く理解できると考えられるからである。

1 各民族・村の生業戦略

者米谷の生態的な環境は、各民族・村によってそれぞれに異なっている〔西谷2008〕。それをまとめると、①上新寨（タイ族）が定住する海拔およそ500～800 mの河谷平野で、緩斜面の面積が広く水量が豊かな地域、②者米河南側のハニ族が定住する海拔およそ500～1,000 mで、低い尾根筋が広がり緩斜面の面積が広く水量が豊富な地域、③者米河の北側で高寨（ハニ族）が定住する海拔

およそ600～1,300 mの者米河沿いから尾根筋で、緩斜面の面積は狭く利用できる水には限りがある地域、④者米河北側のアールー族が定住する海拔およそ600～1,300 mの尾根筋で、緩斜面の面積が狭く水田に利用できる水には限りがある地域、⑤者米河南側のヤオ族が定住する海拔およそ800～2,000 mで尾根筋が複雑に錯綜し急斜面と森林が広がる地域、⑥クーツォン（老白寨）族が定住する海拔およそ1,000～2,000 mで尾根筋が複雑に錯綜しかつては森林が広がっていた、6つの地域である。

そして者米谷の生業変化を時代ごとにみると、1970年代以前、生産請負制がはじまり換金作物が盛んに導入される1980年代～2003年、さらに換金作物の進展が進む2004年以降という、3つの画期に分けることができる（図10、図11、図12）[西谷2008]。そこで、灌漑システムから抽出した水田利用の多様性を絡めながら、各村の生業戦略の特徴を述べてみたい。

上新寨（タイ族）の生業も3つの画期によって大きく変化する。しかし生業戦略に通底する特質は、河谷平野という特定の生態的な環境を選択、もしくは占有することで、海拔およそ800 m以下の緩斜面の土地と豊富な水を利用して水田稲作に特化しつつ、野菜栽培といった生業の一部を放棄する点にある。

牛籠（ハニ族）の生業戦略の基本は、上新寨と同様に耕作地が海拔およそ800 m以下にあるという有利な条件をいかし、水田稲作に中心をおきつつ、斜面畑で換金作物を栽培するという生業戦略をとってきたことにある。一方、牛籠と同様にハニ族の村である高寨は、画期によって栽培する作物の種類は異なるのだが、水田稲作よりもむしろ斜面畑に生業の中心をおいた生業戦略をとってきた。

カービエン（アールー族）では、棚田の規模やその灌漑システムの精緻さと複雑さから水田稲作が中心であるかのようにみえる。しかし生業の重点は、水田稲作ではなく斜面畑におく。斜面畑に生業の中心をおく高寨との相違は、土地利用の開発が進むことで水源涵養林が存在しないことと、斜面畑で野菜を盛んに栽培し、それを者米の定期市で他の民族に販売することで市での野菜販売をほぼ独占してきたことである。

梁子寨瑤二隊（ヤオ族）の周辺は樹林の面積が広く、大冷山と西隆山の周辺には、原生林が残り、1990年代まで焼畑、水田、狩猟採集といった生業を複合的にこなってきた。また彼らは、者米谷に移り住んだ1920年代から森林で藍の栽培をおこなっており、それは1990年代まで続いた。1990年代に入ってから、藍の栽培と並行して草果の栽培を開始する。草果は、森林内でしかも海拔およそ1,500～2,000 mの山地で栽培するのだが、これが現在の主要な換金作物となっている。彼らの生業は水田稲作や斜面畑といったある特定の生業に特化するのではなく、生態的な環境を網羅的に利用しつつ森林利用に卓越してきた点に特徴がある。

老白寨（クーツォン族）の生業は、1990年代以前まで焼畑と野生動物狩猟が中心だった。村の周囲の森林は残しつつ、彼らが使用している谷全体を一度ほぼ全面に焼き尽くし、そのなかの一部の土地を毎年焼いて畑にし、陸稲、トウモロコシ、キャッサバを栽培しこれが主要な食料になってきた。そしてその収穫の不安定さを補うために野生動物を狩猟し者米の市で売るか、他の民族の村に直接出向き、コメ、服、鉄製品との交換をおこなっていた。1990年代以降は、焼畑と動物狩猟はほとんどおこなわず、草果栽培とヴェトナムで商品を仕入れて市で売る交易が中心になっている。

生業戦略に差異が生じる要因に、まず利用する土地の高低差があげられる。海拔およそ800 m以下ではコメの二期作、パラゴムの木、バナナの栽培が可能になるとともに、各村の灌漑システムの

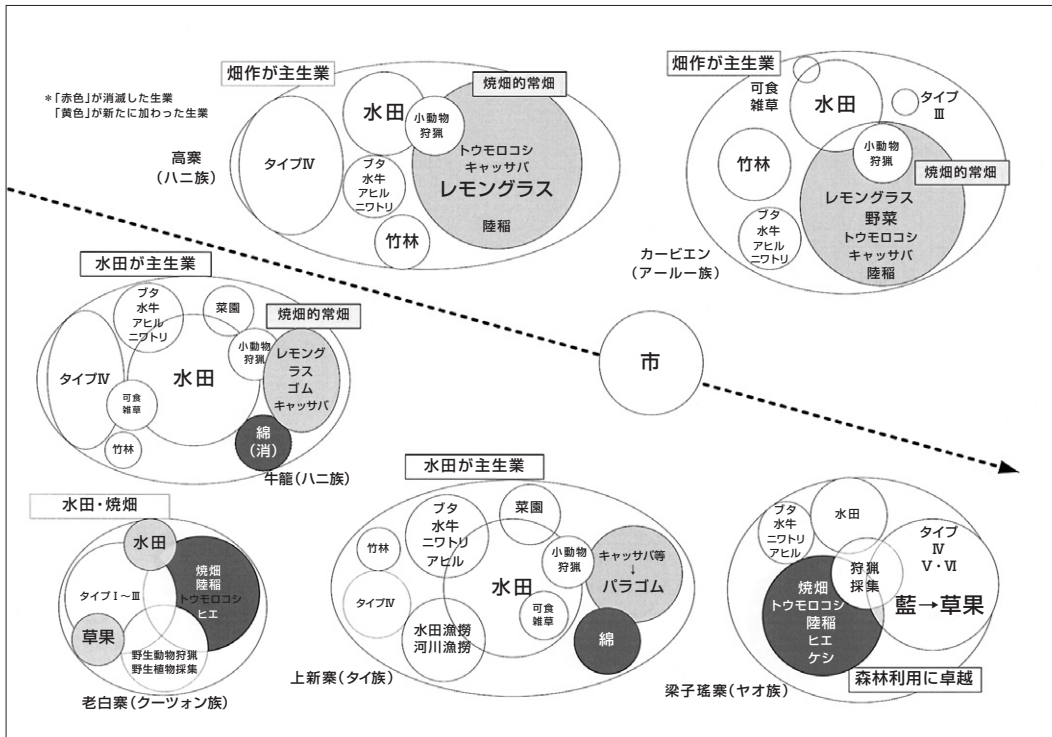


図11 1980年代～2003年の生業戦略の変化

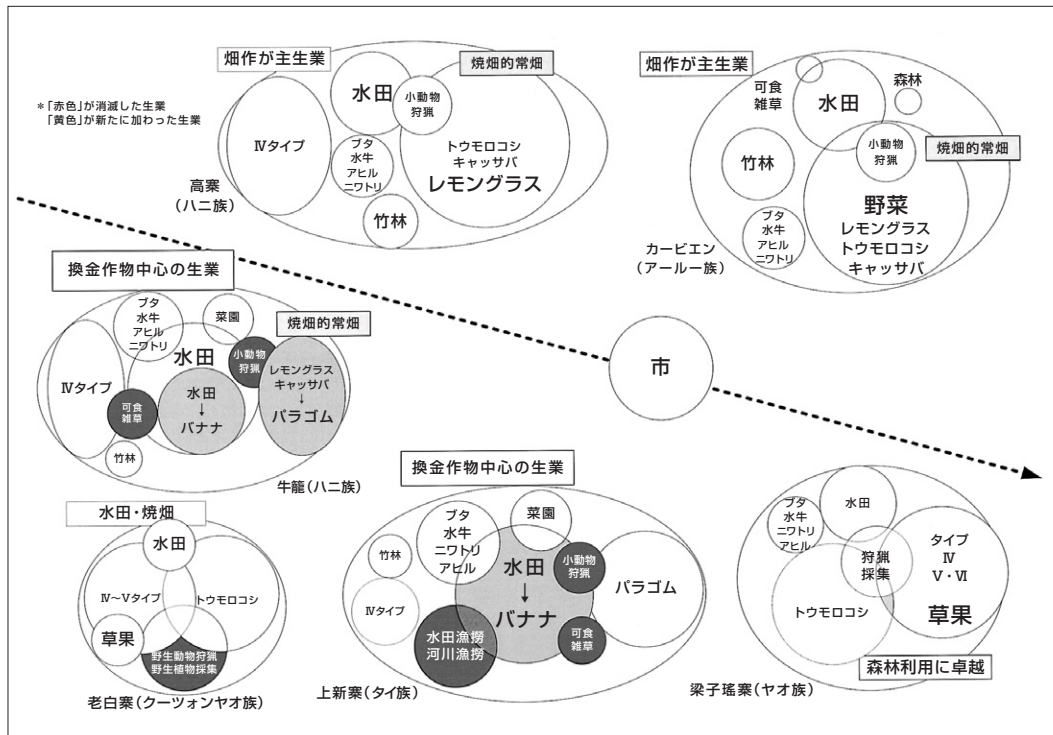


図12 2004年以降の生業戦略の変化

トロールの多様性が残るといふ。水田のもつ特質は「人間の行う生産活動一般に農業を対比させたとき、農業の際だった特徴は自然的環境条件に対する依存度が極めて高いことである」という主張である⁽²¹⁾ [福井1997]。

者米谷における6つの村の生態的な環境利用を、灌漑システムと水利用から比較してみると、「自然的環境条件」が大きな影響を与えている。いいかえれば自然的環境条件の差異が存在したからこそ、灌漑システムを通じて各村の生業戦略の差異を抽出できたのだといえる。確かに生態的な環境の多様性が灌漑システムの多様性を生み出しおり、水田は「自然的環境条件」によって、その形態が左右されている。しかしそれだけでは、者米谷の各村の生業戦略を理解することはできない。

市川昌広は、東南アジア島嶼部の熱帯雨林気候下にみられる湿地田稲作の植え付け技術は、これまで移植であると画一的に分類されてきたことに異論をとなえている [市川2000a・b, 2003]。彼はサラワクのイバンは、移植による田植えもおこなうのだが、種籾を水田に直接撒く散播という方法も使い、湿地林植生の状況に応じて雑草の多寡を見極め、数年ごとに移動しながら湿地林に田を開くことを明らかにしている。その目的は雑草の影響を少なくするためと、散播が移植より労働力の省力化がはかれるためであるという。さらに散播をおこなう理由として、イバンの生業は、焼畑、換金作物の栽培、自家消費や販売のための狩猟や林産物の採集、または出稼ぎなどのさまざまな仕事を複合的にこなっており、水田に投下する労働力も、他の生業との関係性をみながら世帯ごとの生業戦略をたてていると指摘している。つまり散播による方法は、他生業との関係性において、田植えを省力化する上で必要な技術だと主張する。市川の主張は、水田は他の生業との関係性によって多様に変化することを示しているといえる。

安室知は日本国内の広い範囲で、1980年代の半ばから水田漁撈についての実地調査を精力的に推し進めた [安室1998, 2005]。その研究成果として水田漁撈について (1) 自給的生業としての重要性、(2) 金銭収入源の重要性、(3) 水田漁撈が生み出す社会統合、(4) 水田漁撈の娯楽性という4つの意義を指摘している。さらに日本の稲作史を、生計維持システム (複合生業論) という視点から再検討をおこなっている。日本列島で稲作への特化が進んだとき、水田漁撈をはじめとする他生業が稲作という生業への内部化が進行し、複合的な生業がおこなわれてきたことが日本の稲作社会の自給性を維持する要因になったと主張する。

者米谷においても、タイ族は日本列島内で進行した状況と同様に、生業を水田に特化させてきた。しかしそれを可能にしたのは、タイ族が水田漁撈や可食水田雑草などの他の生業を水田稲作へ内部化したことに要因があったからだとは言い切れない。むしろ生業を斜面畑に集中させ、野菜栽培を精力的におこなうアールー族や、森林利用に卓越し藍の栽培をおこなってきたヤオ族、そして野生動物の狩猟を生業としてきたクーツォン族など、生業戦略が異なる複数の民族・村の存在と、相互の生産物の交換を視野に入れる必要があると思われる [西谷2006c, 2008]。

つまりタイ族の生業が水田へ特化できた要因として、タイ族が生産しないモノを他の民族・村が補完的に生産することで成立していた点が重要であろう。タイ族は、他の民族・村が野菜栽培、藍の栽培、野生動物狩猟といった生業をおこなうため、こういった生業を放棄する、すなわち外部化することが可能になり、水田稲作への特化が進展していった。その結果として水田漁撈や可食水田雑草の採集を、水田稲作に内部化することができた。タイ族が水田稲作に特化できたのは、異なった生業をおこなう他の民族・村の存在があったからこそ可能になったのであって、水田漁撈や可食水田雑草を水田稲作に内部化したのはその結果だったと考えられる。

者米谷では、同じような生業をおこなう村が均質的に展開しているのではなく、各民族・村が者米谷の多様な生態的な環境を特定の、選択的に利用または占有することで、生業戦略に差異性が創出されている。いいかえれば各民族・村ごとに利用する生態的な環境の差異性を、生業戦略の差異性に転化している。しかもそれだけではなく、者米谷は、比較的狭い範囲のなかで多様な生業戦略が集合し相互に補完しあうことで生業複合体を形成している。そしてこの生業複合体の特徴は、単に生産物を交換することを意味しているのではなく、生業システムそのものを相互に補完しあっていることに特徴があるのだといえる。

3 定期市と生業複合体

最後に灌漑システムを通じて抽出した各民族・村の生態的な環境の差異、環境利用の差異、それに生業複合体と定期市との関係性について述べる。

尹紹亭は雲南省の広い範囲で少数民族がおこなってきた焼畑を調査し「焼畑は、完全に閉ざされた人類生態システムであるとはいえない。部分的には外界とのつながりがあり、いわゆる市場などを通して外界に依存している部分もある。例えば綿花、コメ、茶、果実をはじめ、林産物である薪、薬剤の原料、屋根材（チガヤ）、山菜、そして狩猟によって得られる動物の肉産物は、低地の民族や商人との間で鉄製の工具、塩、薬品、糸と針、日用品などと交換されてきた」と述べ、彼らの日常生活において生産物の交換が重要な地位を占めていることを指摘している〔尹2000〕。

者米谷という1つの地域においても、多様な生業戦略が集合し相互に補完しあうことで生業複合体を形成しているのだが、そこには市の存在が大きく影響していることが明らかになっている〔西谷2005a, 2005b, 2006b, 2007b〕。者米谷では、河谷平野の町や村では6日ごとに1回の定期市がたつ。これまでの市の調査によって、市のもつ「生産物の現金化と生活必需品の購入」「生産物の処理の自由度と技術の分担による製品の分業創出」「徒歩移動における限界性」「小商いの集合による商品数の創出と多様な選択性」といった特質を明らかにしてきた。そして市のもつこの特質こそが、各民族・村の生業戦略の差異化をより促進させるとともに、生業複合体をより強固で緊密なシステムへと進展させてきた。

者米谷の市を成立させている要件の一つである「生産物の現金化と生活必需品の購入」とは、市周辺の村民が定期市を利用して生産物を販売し、その収入で生活必需品などを購入することである。例えば者米の場合だと、アールー族は野菜を、タイ族はブタ肉、白い木綿布、輸入した野菜・果実を、ヤオ族は藍・草果、ハニ族は藍染めの木綿布を、クーツォン族は籐籠・野生動物と、各村・民族ごとに定期市で販売する商品に差異性があつた。各民族・村は同じ生産物を持ちよって売り買いしているのではなく、意識的に差異性を創出しそれを交換に結びつけてきた。

さらに「生産物の処理の自由度と技術の分担による製品の分業創出」は、市という場は交易がはじまると自然発生的な分業体制というシステムを生起させる機能を持ち、商品の差異が創出されていく。この分業体制は、各民族が得意な技術を所与のものとして有していたために発生したというよりも、市という場で交易がおこなわれ、相互に得意分野を認識することで、差異性を強化しながら創出されたことに特徴がある。つまり市には「差異性の認識による分業創出機能」が埋め込まれている。反対に市を利用し生産物を売る側の立場にたてば、商品の差異性を創出することが絶対的に必要になる。

また移動商人側からみれば、村民の「徒歩移動における限界性」は、移動商人が活躍する場を作

り出しているのだが、彼らは者米谷では生産されない商品を輸入し、その商品の種類の差、価格の差、そして市日の差を利用しながら利潤をあげている。

定期市のもつ特徴である「小商いの集合による商品数の創出と多様な選択性」は、各露店の品揃えの商品数は少ないのだが、それぞれの露店は、他の店が販売していない種類の商品を品揃えすることで差異化をはかる。さらに市全体としては差異が集積することによって、網羅的に商品を取りそろえることができる。そして定期市は「定期市と常設店との差別化」と「売買関係の特化」といった新たな機能を創出することで、都市のなかでの存続を可能にする。

者米谷の生活世界は、民族・村単位で生業が相互に補完しあう生業複合体によってささえられており、それを可能にしたのが定期市である。定期市とは、生計を維持するためのシステムの1つなのだが、生産物を交換し利潤をあげるという市場メカニズムが機能する場にほかならない。そして交換が成立するためには、モノに差異性を創出することが必須の条件となる。

例えばタイ族は市を介することで、コメを戦略的に利用して水田稲作に集約化し、その上で他の生業が水田稲作に内部化した戦略をとることが可能になった。アールー族が斜面畑に特化できたのは、市を介した野菜販売という手段を編み出したからである。またヤオ族は森林利用に卓越し、生態的な環境を網羅的に利用する自然埋没型の生業戦略なのだが、それは市を介して藍や草果とコメ・野菜などと交換できたために可能になったのだといえる。

灌漑システムの多様性から、者米谷は生態的な環境が多様であり、各民族・村によってその利用に明確な差異性が生じていることを明らかにしてきた。そして者米谷では均質的な環境利用と同質的な生業形態を有した村が平均的に展開しているのではなく、各民族・村単位がそれぞれに異なった生態的な環境を利用することで、生業戦略に差異が生起している。

確かに各民族・村単位での生業戦略を個別にみると、生態的な環境と共生した生業戦略をとっている。ところが者米谷の各民族・村の生業戦略と市が作る生業複合体とは、人が生態環境の差異を生業の差異に転化し、生業の差異から生産物の差異を生み出し、市を介することで交換し生計を維持するシステムだといえる。そしてこの生業複合体の基本は、村単位の自給自足的な生活世界を超え、各民族・村が生態的な環境の差異を、差異のある生産物＝商品に転化するという生業戦略にあったと考えられる。

註

(1)——者米拉枯族郷、老集寨郷は、西北から南西に流れる者米川の河谷平野と、その南北に広がる山地から成りたっている（以下この河谷平野と南北の山地をあわせて者米谷と呼ぶ）。

(2)——本稿の者米谷における基礎的なデータは、科学研究費補助金（基盤B 15401037、平成15～18年度）『実践としてのエスノ・サイエンスと環境利用の持続性—中国における焼畑農耕の現在—』（代表、篠原徹）による。フィールド調査は、2003年3月10日～3月20日、同年8月25日～9月12日、同年11月5日～12月25日、2004年5月18日～

6月15日、同年10月15日～11月22日、2005年7月11日～9月15日、2006年1月23日～2月24日、同年9月21日～11月2日、2007年1月23日～3月31日の計9回おこなった。それぞれの調査期間を合計すると、およそ1年になる。

(3)——安室知は、こうした視点にたち日本の水田漁撈の研究から、稲作単一史観とは異なる日本の稲作の展開史を論じている〔安室1998, 2005〕。それによると、日本の水田の初期段階では、さまざまな生業の並列化、つまり稲作、畑作、漁撈、採集といった生業が、別個におこなわれ並列していたものが、稲作の技術水準があがり、

稲作への特化が進むと他生業の稲作への内部化がおこったと主張している。

雲南省に広がる棚田＝稲作をめぐる生計維持システムの理解を推し進めれば、安室が日本の稲作の歴史について主張したと同様の結果が得られると思われる。すなわち雲南省の辺境に位置する1地域の稲作の展開史を理解するだけでなく、中国における歴史上の水田のもつ多様性を解き明かす手がかりにもなると考えられるのである。

(4)——例えば王清華は、「ハニ族は、哀牢山の自然生態環境に対して、深い知識をもち、自然を尊敬し適応しながら、自然を利用するという規範ののっとして(棚田による)農業を実践してきた」(括弧内は筆者注)と述べている。

(5)——百瀬邦泰は、ハニ族が棚田を維持するために水源となる森林＝竜山の保護が重要であり、ハニ族自身もその大切さを認識していると述べている。しかし現在森林が維持管理されている背後には、解放後の大躍進時代の政治的権力の介入による森林伐採の罰則行使の導入と、それにもまして竜山が与えてくれる生活に与えてくれる喜びが重要であると指摘している〔百瀬2003〕。

(6)——世界文化遺産がもつ、価値観の一元化という問題については、吉田憲司編集の「特集文化遺産とミュージアム」を参照(『民博通信』No.108, 2005)。

(7)——上新寨、カービエン、梁子寨瑤二隊の灌漑システムについて、その差異と特徴は以下の通りである〔西谷2006a, 2007a〕。

上新寨は黒タイ族の村で、戸数は65戸、人口はおおよそ320人を数える。上新寨の耕作地は谷筋の谷川周辺から、両側の斜面にかけて展開している。水田は谷筋の入口から中央を流れる谷川の周辺沿いに分散し、比較的斜度の緩やかな海拔おおよそ600～700mの間の斜面に棚田を形成している。

村の棚田への灌漑は、谷の中央を流れる納味川から直接導水する方法と、谷筋を流れる小河川から水を棚田におとすという2つの方法がとられている。そして棚田と水源である河川の取水口との距離が数十m以内と非常に短く、水を引く量は自由な調節が可能で、灌漑用水量は非常に豊富なことが特徴である。

棚田の灌漑方法は、納味川から直接導水する方法と、谷筋を流れる小河川から水を棚田におとす方法の2つがある。しかしいずれの方法でも、籬壇状に構成された田への利水は、最上段に水を入れ、下の水田の棚田に接した畦畔を1～2ヶ所切って田越しによっておこなう点では共通している。そして最下段の田に流された水は、畦

畔を切って外部に流す。このように田越しによって灌漑する方法を「縦灌漑」と呼んだ。

上新寨の水田では、毎年、各家の水田面積に応じて管理費を徴収する。その額は水田1ムー(6.667a)に対して4元である。村の65戸から徴収された管理費は、村内で選出した2人の男性に手渡す。納味川から水田へ、そして上新寨へと導かれた水路については、1年を通じてこの2人が管理する。各民族・村の灌漑水路の管理方法は、それぞれに異なっているのだが、上新寨の場合は、水田の面積に応じて管理費を徴収する点に特徴がある。

カービエン(アール族)は、者米から北東に直線距離にしておよそ3kmの地点にある。村は北から南に伸びる尾根の先端部分に位置し、戸数は29戸で人口はおおよそ120人を数える。棚田は北から南に伸びる尾根上の東と西の斜面に広がっている。

カービエンの棚田は、者米谷の中央を流れる者米川の河床からおおよそ400mの比高差があるため、灌漑水路を直接、者米川から引くことはできない。そこでカービエンの棚田よりも高い田頭沖川の地点を選んで導水している。

田頭沖川から取水した水は、おおよそ5kmある灌漑水路によって村の棚田まで導水される。灌漑システムの最大の特徴は、灌漑用水を分水木によって均等に分割する点にある。分水木とは角材の上に凹形の溝がいくつか穿ってあり、これを用水路に対して直角に置き水を堰き止める形で設置する。分水木の長さは、用水路の幅にあわせて作られるが、溝の高さもそれぞれの分水木によって異なり5～10cmある。用水路の水量が少なく、水位が分水木の溝の高さより低い場合は、溝を通ることで水が自動的に一定量に配分される仕組みになっている。つまり分水木は水が少ない、または渇水状態になり、用水路の水量がある一定以下のときに作動する。いいかえれば水という共有の資源を、等量に分配するシステムだといえる。

村まで導水された水は、村の入り口に設置された分水木で(A地点)で、4つの棚田地区に分水される(I～IV区)。このうち3つの各棚田地区(I～III区)には、それぞれ灌漑総水量の21分の4が、残りの1つの棚田地区(IV区)へは21分の9の分量の水が、分水木を使って自動的に供給されるシステムになっている。各棚田地区には40～50筆の棚田があり、それを上から下へと3～4つにグループ分けされている。導水された水は、分水木によってグループごとに大きく分水された後、さらに各棚田の横に設置された分水木によって細かく分けら

れ横方向から落とされる。水を水田の横方向から入れる方法を「横灌漑」と呼んだ。

村の導水された灌漑水路の総量を100とすると、I区にはそのうち21分の4の水が流される。つまり総水量100のうち19.05%が供給されている。上・中・下段には、それぞれ当分に水を配分する仕組みなので、各段の棚田群にそれぞれ総水量の6.35%を供給していることになる。各段に等量に分配された水は、分水木を通すことで各筆の水田に分けられる。

アール一族は、1950年代以前からこのような分水木によって水を配分するシステムをもっていた。しかし現在の水の配分率は、1980年代はじめに生産請負制が開始された、その当時の家族構成に依拠している。つまり水の量は、当時の家族内における労働が可能な人数を根拠にして分配されており、1人分に割り与えられる水の量が、0.21~0.25%になるよう計算されている。

各家の水の配分量と、棚田の面積との関係を調べると、総水量の0.01%で灌漑されている水田面積は、8.3㎡から30.7㎡とおおよそ3.5倍もの差があった。水の供給量は各家によって規定されているのだが、反対にその水を使って水田の面積を増減することは各家の自由裁量によって可能である。つまり水の量は厳格であるが、それをどのように使うかは各家の戦略にまかされている。

水の管理費は、各家に水を配分した人数が基準になっている。I区を例にして述べたように、分水木の幅は各家に人数分の水を配分する仕組みになっており、配分量は厳密に決定されている。水の管理費は、1人分の水配分量に対して7元（おおよそ105円）を徴収する。2人分の水を配分されている家は14元、4人分の場合、28元を納めることになる。集めた管理費は、管理を委託された2人に渡される。この2人は、水源から村までのおおよそ5kmの灌漑水路および、棚田内の各水路の管理・修復をおこなう。

このようにカービエンでは水が常に不足状態にあるため、水の配分・管理もすべて水の量が基準になっている。そのため灌漑システムを維持するために、村を単位とした強い共同性をもつことが特徴である。

ヤオ族の村である梁子寨瑤二隊は、者米の東おおよそ12kmに位置する茨通壩から、南におおよそ3kmの地点にある。このあたりの地形は、大冷山から南北方向に延びる尾根と、さらにその尾根筋から派生する東西方向の尾根と谷筋がおりなす複雑な地形を呈している。梁子寨瑤二隊は尾根上で、さらに周囲より瘤状に高くなったトップに位置し海拔おおよそ1,000mを測る。村は40戸で人口

はおおよそ180人である。

梁子寨瑤二隊が所有する棚田の大半は、村の周囲に展開している。棚田は村が位置している東西に延びる尾根の南側斜面と、村から者米谷に下る尾根上に作られている。最も北に位置する尾根上の棚田までは、村からおおよそ1kmあり徒歩でおおよそ15分を要する。梁子寨瑤二隊の灌漑用水の水源には3つのタイプがある。第1は湧水を利用する方法である。第2の水源は、丘陵の尾根筋を流れおりにくる水を利用する方法である。第3の水源は、谷筋の溪流を利用する方法である。梁子寨瑤二隊の南には2つの尾根が北から南に延びているが、その間の谷筋を1本の溪流が流れている。溪流は村から700mほど谷筋をさかのぼった地点で海拔がおおよそ900mになり、ここから水を取り入れている。

棚田の各水田には、まず最上段の端から水を取り入れ、それを水田の反対の端に流し、畦に水口を作り下の水田に受け渡していく方法である。

梁子寨瑤二隊において、田越しによって水を上段から下段の水田へと流す方法をとるのは、まだ分家がおこなわれていない家である。しかし、すでに子供が分家し独立していた場合は、田越しによる灌漑をおこなわずに、独立した各家が個別に灌漑用水路から水路を直接開削し、自分の水田に導水し水を横方向から入れる。つまりアール一族のカービエンと同様の横灌漑によって水を配分している。しかし分水木を使った複雑な水分配システムは存在しない。また水量は充足しているため取水の制限をおこなわず、個人が灌漑用水路から自由に自分の所有する水田に水をおとすことができる。

棚田の上下で所有者が異なる場合、水は基本的には各家に個別に流す。そして田越しによる灌漑は、上下の水田の所有者が同じ場合に限っておこなわれる。また下段の水田の持ち主は、水田の水が不足している場合に、上段の水田の畦を切って水を自由に自分の水田におとすことは許されない。ただし上段と下段の水田の持ち主が異なる場合でも、上段の水田の水が余っている場合に限って、上段の水田の所有者が畦を切って、水を下段の他人の水田におとすことは自由にできる。

灌漑用水路の管理は、各家が水路の不具合を発見した場合には個人で修復する。1つの棚田区域でいくつかの家族が水田を所有しており、しかも水路の修復に人数が必要なときは、その場で相談の上各家から人を派遣して修復する。

このように、鄧家と1隊の水田でみられる灌漑システムの特徴は、タイ、アール一族とは異なり、村を単位と

して共同で水田の開拓、灌漑システムの構築、水の管理維持をおこなうのではなく、各家単位が基本になっていることに特徴がある。

(8)——東経102° 31'~103° 38', 北緯22° 26'~23° 04'の間

(9)——以下掲載する図、表、写真は、すべて筆者が作成、または撮影したものである。

(10)——者米拉枯族郷、老集寨郷は従来1つの郷であったが、1978年に2つの郷に分離した。

(11)——北と南でその地形が若干異なる。北側の老集寨郷では、1,200~1,800 mの山が郷全体に散在し、尾根は者米川に向かって南北に走る。者米川の南では、ヴェトナムとの国境を区切る2,000 m前後の脊梁山脈が西北から東南へ屏風のように連なる。海拔3,074 mの西隆山は、ヴェトナムとの国境にまたがる金平県の最高峰である。

(12)——例えば者米谷のほぼ中央の河谷平野に位置する頂青(海拔およそ480 m)では、最も暑い6月の平均気温が25.5度で、1月が最も寒く平均気温は、15.5度になる。年間降水量は、およそ2,000mmである。ところが同じ者米谷でも海拔1,160 mの地点にある古聡大寨では、6月の平均気温が22度、1月の平均気温が12.4度と、河谷平野と平均気温に3度近くも差がある。

(13)——漢字表記は、それぞれ傣(タイ)、哈尼(ハニ)、瑤(ヤオ)、古聡(クーツォン)、阿魯(アールー)、苗(ミャオ)、壮(ジョワン)、哈備(ハーベイ)、莽(マン)である。アールー族は、彝(イ)族の一支族であり、クーツォンは拉枯(ラフ)族の一支族である。本稿ではカタカナ表記で民族名を表記する。

(14)——2000年の統計によれば雲南の少数民族の総人口は1415万3千人で、雲南省総人口の4235万9千人の33.48%を占め、少数民族の人口は、広西壮族自治区に次いで中国第2位である〔謝1999〕。現在、中国では56の民族が政府によって公定されているが(漢族を含む)、そのうち雲南省内において人口が4,000人以上で、しかも一定の集住がみられる民族は26を数える。さらに雲南省だけに居住がみられる少数民族は15にのぼる。また雲南省は、ミャンマー、ラオス、ヴェトナムと国境を接しており、その距離はおよそ4,060kmにも達する。そのため20近い民族が、国境をまたいで分布している。

(15)——国家が公定する56の民族(漢族を含む)に含まれない民族。独特の言葉をもち、かつては村内婚しかおこなわれていなかったという。金平県だけでなく、雲南省においてハーベイ人が居住するのはこの村だけだといわれている。

(16)——タイ族は、「黒傣」、「白傣」、「普耳傣」、「曼仗傣」の4つの支族に分類されている。それぞれの支族は言語だけでなく風俗習慣も異なっている。これらの4つの支族はおそらく金平県に居住しはじめた時期が異なると考えられる。白傣と黒傣が最も早く金平県に移住してきたといわれ、伝承によると広西壮族自治区方面から移住してきたという。次いで普耳傣、曼仗傣がおおよそ200年前に戦乱を逃れて西双版纳傣族自治州方面から移住してきたという〔和2006〕。者米谷では上新寨と頂青が黒傣族の村であり、その他はすべて白傣族の村である。

アールー族は、イ族の一支族である。イ族は雲南省内におよそ406万人居住するが、大きく「黒彝」系と「白彝」系の2つに分かれ、イ語系の言葉は、漢・チベット語族チベット・ビルマ語群に属する〔村松1987, 謝1999〕。イ族の祖先は、かつて漢族から「夷人」「夷家」と総称されたが、これは漢代に雲南を「西南夷」と呼んで以来の伝統的名称である。黒イは四川省大凉山地区を中心として住み、武士族が主階級となり、奴隷を支配する奴隷制社会を形成してきたことで有名である。大凉山地区より南方の雲南省に住むイ族が白イと呼ばれている。イ族自身の自称は住んでいる地区や方言によってまちまちで、金平県でも「アールー(阿魯)」以外に、「尼蘇」、「姆基」、「阿普」、「老鳥」の4つの呼び方がある。

ハニ族は、雲南省内におよそ150万人居住する。ハニ語は、シナ・チベット語族チベット・ビルマ語群に属する。主に雲南省西南部の哀牢山脈にある新平、鎮源、墨江、元江、紅河、元陽、緑春、金平、江城などの県に住む。ハニ族の祖先は、漢代には雲南省の南部の瀾江流域に住んでいた叟人の和という部族だったといわれている〔村松1973〕。元代にモンゴル軍が雲南省を支配するとその支配下に入り、明・清代以後は土司に支配されていた。ハニ族が多く暮らす元陽県では、みごとな棚田を切り開いていることで有名である。金平県にはいつ頃から居住しはじめたのか文献上からはよくわからない。しかし伝承によると、今から300~400年前に元陽、河口などから金平県に移住してきたという。県内では「糯美」「糯比」「多尼」「郭卓」「阿梭」「格河」の6つの呼び方がある。

ヤオ族は、雲南省内におよそ172万人居住し、漢・チベット語族ミャオ・ヤオ語群に属する。ヤオ族は、宋代に「山猺」という記載が文献上に登場することから、もっぱら山中で焼畑と狩猟採集を生業とする民族であったと考えられている。移動を繰り返すため民族全体としてのまとまりはあまりなく、小さな集団が広い地域に分散して居住しており、その状態は現在も続いている。ヤオ族

の祖先は唐・宋代ごろから湖南から山伝いに焼畑をおこないながら南進し、明代には広西壮族自治区・広東省にまで進出した。雲南省にいつ頃やってきたか意見が分かっているが〔謝 1999〕、少なくとも明代末から清代はじめには金平県に隣接する河口県にまで到達していた。

ラフ族（クーツォン族）は、雲南省内におよそ45万人が暮らすといわれている。チベット・ビルマ語系イ語系のラフ語を話す。羌族と同じ祖先をもち青海チベット高原から絶えず南へ移住するなかで形成された民族であり、者米谷には1930年代にヴェトナム方面から北上してきた。ラフ族（クーツォン族）は、自称として「拉枯納（黒拉枯）」「拉枯西（黄拉枯）」「拉枯普（白拉枯）」の3つがある。雲南省内では西双版纳傣族自治州のうちでも、ビルマよりに分布の中心がある。国境をはさんでビルマにおよそ15万人、タイ王国にもおよそ10万人が暮らしているといわれている。ラフ族（拉枯族）の「拉（ラ）」はトラを、「枯（フ）」は香りよく焼くという意味をもつ。つまりラフは「トラ食べる人」をさす。その名の通り狩猟を生業の中心とする山岳民族で、他の民族からはトラ狩りの民族とも呼ばれてきた。

(17)——現在も村単位の移住はおこなわれている。例えば者米の南、およそ3kmの地点にある小白村は、2006年に者米の東およそ1kmの道路沿いに移転した。

(18)——測定方法は、まず灌漑用水路を流れる水の幅と10cmごとの深さを測り、断面積の近似値を求めた。次に灌漑用水路を流れる水が5m進む時間を測定し、毎秒ごとに流れる水量を計算するという方法をとった。

(19)——梁子寨瑤二隊には「土地廟」があり、李紅春という人物を祭ってある。梁子寨瑤二隊の鄧金龍によれば、ヤオ族が者米谷に移住する以前は、現在の村周辺にはハニ族が住んでいた。しかしハニ族はなまけもので、タイ族の手伝い仕事ぐらいしかしない。そこで茨通壩の土司は、ハニ族を現在の梁子寨瑤二隊周辺の土地から追い出し、ヤオ族を住まわせることにしたという。ヤオ族は山で藍を植え、タイ族と綿布などと交換するようになり生活が安定した。ヤオ族は感謝し、土司を祭る廟を作ったという。

茨通壩に住むタイ族の毛（68才）からの聞き取り調査によると、茨通壩の土司は、巴壩の壮族の李一族が、清の地方政府から権利を買い取り、1910年ごろから土司になったという。初代の土司の名前は李有林、2代目は李成林（1920年ごろから）、3代目が李紅春（1938年から）だという。李紅春は1年後に暗殺され、それ以降茨通壩に土司は不在になる。これらのことからヤオ族に

とって伝承上の人物である李紅春は、おそらく実在の人物だと考えられる。土司がヤオ族のために、ハニ族を強制的に移住させたことが真実か否かは不明だが、ヤオ族が1930年代に者米谷にやってきた可能性は高い。

ヤオ族は、まず焼畑をおこないながら土地を拓き棚田を作ってきた。しかしヤオ族は現在でも家族単位で、者米谷以外の地域へと頻繁に移動する。その場合でも灌漑方法が田越しではなく、各家族単位におこなう灌漑システムだと、たとえ一部の棚田が休耕田になっても、村全体としては水の分配に問題が生じることはない。ヤオ族の水田の灌漑システムが、1家族を基本の単位としているのは、彼らの移動を煩雑におこなう生活スタイルと深く関わっているのではないかと考えられる。

(20)——さらにその後、「山間盆地の稲作（扇状地の稲作）」「デルタの稲作」「平原の稲作」「湿地林の稲作」「火山島の稲作」5つの類型に分類している〔高谷 1985, 1987〕。

(21)——高谷好一は東アジアの稲作を、景観論的な立場から「扇状地の稲作」「デルタの稲作」「平原の稲作」「湿地林の稲作」の4つの稲作型に区分している〔高谷 1978〕。その理由は、いろいろな稲作があるけれども、けっきょくは与えられた自然条件が同じようなところには同じような性格をもった稲作が成立するという、生態的な要因で水田は決定されるためだという。

福井捷朗は東南アジアのフィールド調査から、畑作の制約要因は気候と土壌であるが、水田稲作の多様性は、水と地形によって決まると述べている〔福井 1980, 渡部 1984〕。ミクロな地形変化が稲作に大きく影響し、稲作は畑作と比較すると多種多様であり、その多様性の原因は、地形による水条件によってほぼ決定されるという。一般的には水のコントロールが発達すると栽培の多様性がなくなり、単純化に向かうという一般則がみられ、多様性として残るのは栽培法ではなく、水のコントロールの多様性が残るといえる。水田のもつ特質は「人間の行う生産活動一般に農業を対比させたとき、農業の際だった特徴は自然的環境条件に対する依存度が極めて高いことである」という主張である〔福井 1997〕。

者米谷における6つの村の生態的な環境利用を、まず灌漑システムという視点で比較してみたが、それは「自然的環境条件」が大きな影響を与えており、そのことが灌漑システムの多様性を生み出している。そのため灌漑システムの相違から、各村の生態的な環境の相違を明確にすることが可能になったのだといえる。

しかし「水田と呼ばれる農地にはその他の農地にはみ

られない人為的な工作がなされる。そこには稲のみが植えられる」[福井 1997] と、水田という場所をコメの生産場所として限定的にとらえることは、水田のもつ多様な機能を見落とすことになる。

また従来一般的にいわれてきたのは、「灌漑農業技術特有の現象として、過去の労働が土地に蓄積されてきたということである。稲作が畑作にはみられない工学的適応という特徴を本来もっている限り、水田にも過去の労働が蓄積される「先祖代々の水田」は、単に所有権が代々

相続された水田というだけでなく、ご先祖の汗がくっついている水田という意味をもつ」[福井 1997] と主張されてきた。

しかし者米谷にみるアール族やヤオ族が短期間に棚田を作ってしまう実態は、水田を作るには長い時間と労働が必要な「歴史のコスト」を必要とするとは限らないことを示している。

引用・参考文献

- Adachi,S. 2007 “Agricultural Technologies of Terraced Rice Cultivation in the Ailao Mountains,Yunnan,China”
Asian and African Area Studies, 6 (2)
- 尹 紹亭 2000 『人と森林－生態人類学視野中の刀耕火種』雲南教育出版社
- 尹 紹亭(白坂 審訳) 2000 『雲南の焼畑－人類生態学的研究－』農林統計協会
- 市川昌広 2000a 「サラワク州イバン村落における移動湿地田稲作の変遷」『東南アジア研究』東南アジア研究センター, 38 巻 1 号
- 市川昌広 2000b 「サラワク州イバン村落における湿地田稲作－植え付け方法にみる適応戦略－」『東南アジア研究』東南アジア研究センター, 38 巻 1 号
- 市川昌広 2003 「サラワク州イバン村落の世帯にみる生業選択」『TOROPICS』12 (3)
- 市川光雄 1997 「環境をめぐる生業経済と市場経済」『岩波講座文化人類学 第2巻 環境の人類史』岩波書店
- 雲南省志編纂委員会 2001 『雲南省志－地理志－』雲南人民出版社
- 雲南省金平苗族瑶族傣族自治州志編纂委員会 1994 『金平苗族瑶族傣族自治州志』三聯書店
- 雲南省緑春県志編纂委員会 1991 『緑春県志』雲南人民出版社
- 王 清華 1991 「雲南亜熱帯山区哈尼族的梯田文化」『農業考古』1991 - 3
- 王 清華 1999 『棚田文化論－哈尼族的生態農業』雲南大学出版社
- 侯 甬堅 2007 「紅河哈尼田形成史調査と推測」『南海学報』(哲学社会科学版), 2007 - 3
- 史 軍超 2002 「対元陽哈尼族梯田申報世界遺産の調査研究」『哈尼族文化論叢』雲南民族出版社
- 篠原 徹 1990 『自然と民俗－心意のなかの動植物－』日本エディターズスクール出版部
- 篠原 徹 1995 『海と山の民俗自然誌』吉川弘文館
- 篠原 徹 2006 「棚田景観にみる歴史性と文化性の相違－中国・雲南省紅河州者米におけるタイ族・ヤオ族・アール族－」『叢書 [文化財保護制度の研究] 文化的景観の成立, その変遷』第18回国際文化財保存修復研究会報告書, 独立行政法人文化財研究所, 東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センター
- 謝 蘊秋・李 先緒 1999 『雲南境内的少数民族』民族出版社
- スキナー, G.W. (今井清一・中村哲夫・原田良雄訳) 1979 『中国農村の市場・社会構造』法律文化社
- 高谷好一 1978 「水田の景観学的分類試案」『農耕の技術』
- 高谷好一 1985 『東南アジアの自然と土地利用』須草書房
- 高谷好一 1987 「アジア稲作の生態構造」『稲のアジア史』第1巻, 小学館
- ダニエルス, C 1999 「少数民族の歴史をどうみるか－近年の研究紹介をかねて－」『アジア遊学』9号
- ダニエルス, C編 2008 『中国雲南少数民族生態関連碑文集』総合地球環境研究所研究プロジェクト, アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の総合研究, 総合地球環境研究所
- 田村善治郎・TEM研究所 2003 『棚田の謎－千枚田はどうしてできたのか－』社団法人農山漁村文化協会
- 中国科学院民族研究所雲南民族調査組・雲南省民族研究所編 1963 『雲南省紅河哈尼族彝族自治州金平県苦聰人社

-
- 会経済調査】(出版社不明)
- 刀 潔 2006 「金平河莽人社会文化調査」『雲南特有族群社会文化調査』(和少英編), 雲南大学出版社
- 中島峰広 1999年 『日本の棚田-保全への取り組み-』古今書院
- 中村哲夫 1978 「清末華北の農村市場」野沢豊・田中正俊編『講座中国近現代史』二, 東京大学出版会
- 西谷 大 2005a 「市のたつ街-交易からみた多民族の交流-」『国立歴史民俗博物館研究報告』第121集, 国立歴史民俗博物館
- 西谷 大 2005b 「雲南国境地帯の定期市-市の構造とその地域社会に与える影響-」『東洋文化研究所紀要』第147冊, 東京大学東洋文化研究所
- 西谷 大 2006a 「雲南国境地帯の棚田-アール族とヤオ族の灌漑システム-」『国立歴史民俗博物館研究報告』第125集, 国立歴史民俗博物館
- 西谷 大 2006b 「市はなぜたつのか-雲南国境地帯の定期市を事例として-」『国立歴史民俗博物館研究報告』第130集, 国立歴史民俗博物館
- 西谷 大・刀潔 2006c 「中国の水田漁撈-黒タイ族のウケ漁-」『国立歴史民俗博物館研究報告』第133集, 国立歴史民俗博物館
- 西谷 大 2007a 「灌漑システムからみた水田稲作の多様性-雲南国境地帯のタイ, アール族, ヤオ族の棚田を事例として-」『国立歴史民俗博物館研究報告』第136集, 国立歴史民俗博物館
- 西谷 大 2007b 「市の誕生と都市化-生業経済の定期市から市場経済の市へ-」『国立歴史民俗博物館研究報告』第136集, 国立歴史民俗博物館
- 西谷 大 2007c 「定住的水田と移動的水田-生業システムからみた多様な水田稲作の姿-」『弥生時代はどうか変わるか』(広瀬和雄編) 学生社
- 西谷 大 2007d 文部省科学研究補助金成果報告書(研究代表・篠原徹)『実践としてのエスノ・サイエンスと環境利用の持続性-中国における焼畑農耕の現在-』(第II部 雲南省金平県者米谷を執筆)
- 西谷 大 2007e 「雲南省紅河州者米谷における生業と市」『総合研究大学院大学 平成18年度特定研究経費事業国際シンポジウム 地域社会の精算と経済-中国少数民族地帯の過去, 現在, 未来-』国立歴史民俗博物館
- 西谷 大 2008 「土地利用と斜面畑からみた水田稲作の多様性-雲南省者米谷のタイ, ハニ, アール族, ヤオ, クーソン族の生業戦略を事例として-」『国立歴史民俗博物館研究報告』第139集, 国立歴史民俗博物館
- 西谷 大・篠原徹 2005 「雲南省紅河州者米谷のアール族とヤオ族の灌漑システム」『コモンズと生態史研究会報告書』文部科学省科学研究費補助金特定領域「資源人類学」
- 福井捷朗 1980 「サラワク低地の土地利用と未利用」『東南アジア研究』17巻4号
- 福井捷朗 1997 「エコロジーと技術-適応のかたち-」『稲のアジア史 普及版アジア稲作分化の生態基盤 -技術とエコロジー』渡部忠世・福井捷朗編, 小学館
- 村松一弥 1973 『中国の少数民族-その歴史と文化及び現況-』毎日新聞社
- 百瀬邦泰 2003 「雲南の棚田地帯を涵養する雲霧帯の土地利用の変遷と竜山の消長」『アジア・アフリカ地域研究』第3号, 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
- 毛 祐全 1991 「哈尼族梯田文化論」『農業考古』1991-3
- 安室 知 1998 『水田をめぐる民俗学的研究-日本稲作の展開と構造-』慶友社
- 安室 知 2005 『水田漁撈の研究-稲作と漁撈の複合生業-』慶友社
- 和 少英 2006 「金平傣族社会文化調査」『雲南特有族群社会文化調査』(和少英編), 雲南大学出版社

(国立歴史民俗博物館研究部考古研究系)

(2007年11月30日受理, 2008年7月29日審査終了)

Diversity in Water and Environment Usage in Rice Terrace Irrigation Systems : Case Study of the Multiethnic Yunnan Border Region

NISHITANI Masaru

The study site is located in Zhemigu, one of the Laojizhai villages of the Lahu people in the Zhemig region of the Autonomous County of Jiming Miao, Yao and Dai, belonging to the Honghe Hani and Yi Autonomous Prefecture in China's Yunnan Province. Here, mountains that are 2,000 to 3,000 meters tall occupy most of the region, leaving little space for flatlands. Eight minority groups (i.e. non-Han) account for most of the population in this region and are scattered throughout it. Each people lives at a different altitude, ranging from a height of 500m in the valleys to 1,500m on mountain slopes, where the geographical complexity and climate generate diverse ecological environments, resulting in different living strategies for each people.

In this article, I studied how the differences in the irrigation system of each people are related to the utilization of the environment, the living strategy and history of that people. I also compared their different living strategies in regard to factors such as irrigation systems and irrigation canals, methods for irrigating each rice terrace, and methods of paddy management.

As a result, it can be pointed out that in Zhemigu, differences in living strategies are generated by each people/village utilizing different ecological environments, rather than there being villages sharing the same utilization of the environment and an identical living style spread throughout the region. Also, characteristic of the living systems of Zhemigu is a complexity created by three differences: differences in ecological environment, utilization of the environment, and living strategy, and related market systems. The complex living system is supported by a sustenance system transcending the self-sufficient livelihood scope of each village, and its basis appears to be the living strategy by which each people/village transforms the uniqueness of its ecological environment into unique products/commodities.

Key words: complex living system, rice terrace, irrigation system, living strategy, utilization of the environment
